1

0050813000

0050813-000

259.5－121

初等教育叢書

文泉堂書房

第５編

昭和７

AHM

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

259.5
121

初等教育叢書

第五編

遊戲と道徳

文學博士　小西重直　序
小川忠治　著

文泉堂書房

帝國圖書館藏書

遊戲と道徳

文學博士 小西重直序
小川忠治著

文泉堂書房發行

昭和七・九・二

259.5-121

初等教育叢書總序

一

晴れたる秋の夜、庭に下り立つて蒼穹を望む時、我々はそこに金星木星火星等、世にその名を知られたる燦然として輝く多くの星を認めるであらう。然も尙よく凝視を續ける時それら知名の星の奥に幾多の、然り幾多の星光を次ぎ〳〵に發見するを得るであらう。然してそれらの中に、例へば牽牛織女の如く、世に知られたる多くのものよりも、却つて更に偉大に更に輝かしいものあるを知り得るであらう。

昭和の聖代は文運に於てまことに晴れたる秋の夜の星空にも似たものといへやう。學問に藝術に道徳に宗教に、我々は輝かしい幾多の知名の大家を數へることができる。然も同時に野に叫ぶ豫言者の偉大にして輝かしきものあるをも認めなければならぬと思ふのである。

二

教育の事たる要するに作用である。故に理論といひ實際といひ共に必要缺くべからざる兩面なるに相違なきも、その何れの方面の研究にせよ、實際家の研究、實際に即しての研究は尊重すべく敬重すべきものなるを常に思ふものである。

三

初等教育は人間の基礎教育であり、從つてその關するところは極めて多方面である。同一事象の觀察も人によつて種々になされ得る點より見れば、多方面の研究には尚更に多くの人の研究に俟つことが必要である。

四

教育は人を作ることであるといへば、世界を通じて教育は唯一つの仕事であり、日本の教育はよき日本人をつくることであるといへば、教育は日本を通じて唯一つの仕事であるやうであるが、巨細に考へればその中に尚地方的にいろ〳〵違つたこともある筈である。同一問題も各地の人によつて地方的特色をもつて研究され發表されることは極めて有意義のことであると思ふのである。

五

今次圖らずも「初等教育叢書」刊行の企あり、初等教育の各方面に亙り、全國各師範學校附屬小學校主事の推薦により、優秀なる訓導諸氏の得意の研究を出版せらるゝ由にて、余は右の趣旨より見て、此の叢書の我國教育の上に必ず實益あるべきを思ひ欣快に堪へないのである。依て敢て刊行を祝し併せて大方に推奨せんとする次第である。

昭和七年四月廿九日　天長の佳節夕

洛北塔ノ段

小西重直

自序

遊技の實行が教育的に見て種々なる價値を有することは既にしば〳〵論ぜられ、特に體育的價値と德育的價値については一般に信ぜられてゐる。然し現在の遊技において、第一に擧げられる體育的價値さへも或疑問を抱かせてゐる。これが德育的價値においては殊更その感が深い。廣大な競技場が單に體育的にのみ考へられるのならば、存在の意義についてはむしろ低下さす所のものである。また遊技の實行者並に實行に伴ふ施設經營等に伴ふ不道德性は掩ふべからざる現實性である。スポーツ淨化が論議されるのは必然の結果であるといはねばならない。從來私は德育的價値について、餘りにも違背した現實性を見るにつけ、絕えず不安と疑問を持つてゐたのである。このために私自身としての心の落付を見出さんとした企てである。故に遊技の德育的價値を再吟味し團體遊技が共同的な存在であることよりして、兒童の本能的社會性の上に團體遊技を正しく樹立し、もつて共同社會人養成に資せんとするもの

である。なほ私の設計圖中には女子についても考察してゐるのであるが、これについては後日また述べる機會があらうと思ひ、今回は男兒についてのみ發表し、一般教育家諸賢の御叱正を仰ぎ、將來もなほ本問題につき微力を盡したい考へである。幸ひにこれが德育的價値實現の參考となり、スポーツ淨化に參畫し得るならば望外の欣びである。尙本論文作成に當り本校主事渡邊先生始め同僚諸兄の御叱正を厚く感謝する次第である。

著者識

遊戲と道德目次

第一章　新教育に於ける德育目標
　第一節　目的より觀て……一
　第二節　方法上より觀て……三
第二章　道德性陶冶と筋肉運動
　第一節　品性陶冶……六
　第二節　社會性陶冶と勞作……八
　第三節　情緒、情操と筋肉運動……一〇
第三章　道德性陶冶と遊戲
　第一節　遊戲の意義……一三
　第二節　兒童の遊戲……一四
　第三節　教育に於ける遊戲の地位……一六
　第四節　遊戲と仕事……二一
　第五節　スポーツ及びスポーツマンシップ……二五
　第六節　一般的德育價値……三〇
　第七節　個人的價値……三四

第八節　社會的價値……三七
第四章　兒童の社會性（男兒について）
第一節　社會的態度……四五
第二節　兒童遊戲より社會性を觀る……五四
第三節　遊戲内に於ける社會性を見る……六一
第五章　兒童の遊戲期と其の取扱方法
第一節　一年生より三年生まで（七―九才）……七一
第二節　四年生より六年生まで（十―十二才）……七三
第三節　六年―高等科（十三―十五才）……七五
第六章　現行遊戲の批判
第一節　尋一――尋三……七八
第二節　尋四――以上……八七
第七章　遊戲の補充教材
第八章　實行方案
第一節　指導者……一一八
第二節　兒童……一二〇
第三節　方法……一二六

遊戲と道德

小川忠治著

第一章　新教育に於ける德育目標

第一節　目的より觀て

現今の教育學說において社會本位的に之が目的論を樹てる事は定論であり、隨つて社會を離れて人格の完成は望まれないと論ずる。かゝる立脚點より全體的教育論は論ぜられるが、特にこの思潮より公民教育、職業教育、鄕土教育が主問題となる事は必然の結果であると云はねばならない。

第一章　新教育に於ける德育目標

しかも社會なる概念は共同社會を理想として認めてゐる。而して社會は個人の自律的關係を、より具體的に實現せんが爲に必然的に又內面的に自ら要求したるもので、人格が實踐的なる限り、無限なる實踐と反省を內包として生れたものである。この結果必然的に他我を求め自他平等に規定するより高い道徳的自我を要求する。この道徳的自我は即ち社會であり、歷史的生活中において、集團の統一を完成し來たつたのである。

然し現在の如き合理的ならざる制度においては、個人と社會は對立する如く考へられるが個人の眞に正しき欲求は却つて社會に拘束を與へる事がある。人は社會の中においてのみ人たり得るが故に社會は個人を拘束するものでなく、眞に自由ならしめるものである。

かゝる社會、個人一體の境地に立つて、更に求める社會は即ち共同社會である。故に現社會の不道徳性に目覺め、之を改造し、よりよき社會の建設に努力する人格の養成こそ眞の教育であり、道徳教育である。隨つて道徳も教育も共同社會人の養成を目的とする時、正しく認識されるのである。

而して共同社會の理想は國家なる姿において充足され、しかも國家は祖國的國家を其の極致とする。何んとなれば純粹なる共同社會は概念であり、直接的に人類全體に對して適用することは出來得ない。目下生存せる一切の人間を國民的社會なる媒介物なしに綜合するが如き被制約的法的秩序を考へることが既に空想であり、夢想であるからである。

こゝに歷史の統一性が共同社會を考へる重要なる要素となるのである。

「人は國家の中において其の人間性を實にし得るもの、人間性は國民性を通じてのみ實にせられるものである。」西博士のこの言は、國民教育に携はる者、否國民全體の方向について明示せるものである。

吾國民道徳は、忠孝によつて統一されたるものであるが故に、共同社會人の養成を教育目的に求めたる私は、歷史の統一によつて作られたる國民道徳の根柢たる君臣、親子一體なる忠孝道による統一體としての共同社會的日本人養成を道徳的目標として求める。然し求める所の國家とは現在の制度その儘を合理的と認容する所から生れるものではない。現在の不合理、不道徳性に覺め、よりよき社會の建設を願ふ社會改造の精神から生れるものである。

第二節　方法上より觀て

新教育は主知主義を捨てて、情意主義に向つてゐるといひ得る。即ち愛の教育、情意の教育を基

として全人陶冶を爲さんとするものである。

かゝる傾向は之を宗教教育、藝術教育の重視に見るべく、又方法論的に考察するならば、(勿論今述べんとする所のものは目的論的に主張せられる點は多々あるが)合料による教育、作業勞作による教育、遊戯化による教育等の主張で、之等は明かに情意主義への轉移を意味するものである。この結果は必然的に兒童の自發性尊重を基礎に持つ教育となる。

しかも之等は全人教育なるが故に、精神的活動と同時に筋肉的活動重視の教育である。即ち生活重視の教育である。この事は道徳教育においても當然重要なる地位を占むべきものでなければならない。何となれば主知主義的社會は共利社會を考へさせ、情意による結合社會は共同社會を豫想せしめるからである。而して全的陶冶とは其の中に於ける知、情、意の全的と、靈肉の全的なる二樣の考へ方がある。然し根本的には靈肉一致の狀態たる全的陶冶を考へる事が正しいと思ふ。何故ならば知情意は主として精神作用と考へられるが、人間の存在は肉體を考へずして存立しない。故に肉體の中に既て知情意を豫想しなければならないからである。

然らば肉體上の作用が如何に精神作用に影響するか、この點の究明をなす事によつて作業、勞作精神が作用に影響する事が確定され同時に遊戯が道徳性の陶冶をなす可能が信ぜられると思ふ。しかも遊戯がその成立の動機に於て社會的であり、且つ共同社會的なる存在である事は、教育目的並に方法の上より考察するも目標達成の爲に有利な手段である事を物語るものである。從來遊戯が道徳性を陶冶する事はよく了解せられてゐるが、遊戯を行はせる事のみによつて徳性の涵養に參畫し得るであらうか。私は遊戯の實行の中に餘りにも多くの不道徳性、非社會性を見る。かゝる矛盾が私に取つて斷えざる惱であつたのである。如何にすればこの矛盾の解決が出來るであらうか。一般に自明の理であると思はれる本問題に就て再吟味をなす事によつて論を進めて行かと思ふ。

第二章　道徳性陶冶と筋肉運動

第一節　品性陶冶

道徳的善の對象は行爲なる語の中に總括され、外面的には肉體の運動であるが、物理的運動でなく一種の意識を具へた目的ある運動である。隨つて反射運動や本能的運動とは區別さるべき性質を有してゐるものである。

元來人間は大體において自己保存の爲に自ら適當なる運動をなす。この際運動に伴つて發生する所のものが意志である。しかも吾々の聯想作用は結果の觀念を起し、手段を擇んで實行せんとする。この目的觀念を意識することによつて意志は成立するもので、一種の統覺作用である。只思惟、想像と區別せられる所のものは、之等が物及自己の全てに關する觀念の統一作用であるに對し、意志は特に自己の活動に對する統一作用である點にある。

故に意志は最も現實的な統一であり、最も明かに自己を意識する。かゝる意志を伴つた活動も元々反射運動、本能的運動より發達し來れるものであるが、かゝる活動が訓練せられたる結果、始めは意志的活動であつたものが無意識的運動になつたもので意志の退化的發達によるのである。故に外面的には機械的活動であり、生活現象であるものが其の內面における眞意義は意志活動であるのである。隨つて行爲を意志と外面的な動作に分析して、原因と結果の關係に於て見る事は誤りであると云はねばならない。結局同一物の兩面的觀察なのである。

品性とは人格の習慣を意味するもので、性格を道德的標準に照して見た時の言葉である。而して品性成立の要件として客觀的なるものと、主觀的なるもの即ち意志作用の二つを考へねばならない。前述せる立場においては如何なる活動といへどもその內面において意志を有する。故に過失なるものも本質的には單に過失なりとして許さるべき性質のものでない。

故に行爲の反復によつて習慣を作るといふ事は、人格に傾向性を與へるといふ事になり、「今日の品性は過去の意志活動の總果として成り、而して將來の意志生活の方向を決定する。」（ヴント）かくて習慣の形成が道德教育における最重要なる意味を持ち、勞作が道德教育における重大なる役割を演ずる事となるのである。

第二節　社會性の陶冶と勞作

「人間には本能運動の外に有意的な反省運動がある。之は其の方向や運動の仕方に關して眞實性的統一的活動としての靈、敬、愛、信――敬虔の作用としての靈の指導を受けねばならない。靈は又常に之に反省を加へ有意的に選擇し決行し價値的に運動を指導する力を有してゐる。靈は肉の運動を價値的に指導するのみならず、それによつて自己自身も亦活力を增進する斯樣な作業の過程が即ち勞作といふべきである。」（小西博士）と、學校において或共同勞作が行はれるとき、個人の意見は必ずしも全體の意見に一致するものでない。兒童の場合においては個人と全體との對立がより多く豫想される。然しこの事は却つて共鳴や意見の相違により、社會體中における自己を發見し社會性の發展に寄與する。

その結果互に仕事に對しても敬愛を生じ、社會運帶、相互扶助、共同、寬大、友愛、秩序、規律遵守等社會人としての諸德を敎養し、團體の一員としての道德的自覺を生ぜしめるのである。

かゝる社會的諸德の敎養は、社會的環境に於て共同勞作を爲す場合に達し得られる諸德である。

如何に勞作が品性陶冶に有效なる方法であるとはいへ、一人の農夫を終日田園に只一人勞作せしめたとするも、この事は達せられないと思ふ。又一方社會的諸德の敎養は現實の社會生活中においても兒童は敎養されるが、敎育的なる共同的勞作においてよりよく、より具體的に達し得る。

觀念的に指導されたる從來の修身敎授も勿論自己反省上の效果はあるし、又勞作そのものが實行と反省によつて、目的達成を希求するところの全的作用なるが故に重要なる要素ではあるが、それのみにては未だ價値の低いものであると云はねばならない。

私は前節において行爲と意志は同一物の兩面的觀察であるといつた。常識的には吾々の身體行動は精神の命によつて營爲される如く思はれてゐるが、今日においては未だ精神作用が物質作用に變化し、物質作用が精神作用に變化する事は證明せられてゐない。身體的行動は物質作用ではない。精神作用と身體運動が並行した時、物質を構成する事は證明せられてゐない。身體的行動は物質を構成するものではなく、物質構成への過程が勞作として價値ある點で、この過程を如實に體驗せんとする意慾が最も價値的なる存在である。

故に身體的活動が目的を有し、精神的活動が身體的活動を伴ふ時眞に體驗せりといひ得べく、かゝる體驗を共同勞作に求める時、社會性の發展を企劃する敎育であり、同時に道德敎育であり得る。

隨つて修身教授は勞作的なる實踐を伴はせる事によつて、完き道德教育としての修身教授たり得るのである。

要するに勞作は精神作用と身體作用が個人的にも社會的にも全人間として生命慾、生存慾に關係して共に價値化される過程に外ならない。故に眞の人格構成は勞作過程を經ることなくしてはあり得ないのである。

「勞作のない眞空瓶の中には人格の完全の構成は不可能である。」（小西博士）

第三節　情緒、情操と筋肉運動

以上は主として意志と筋肉運動に就て述べた。道德が意志を必須要件として考へられてゐると同時に情緒、情操も亦道德に密接な關係を有するものである。道德的知識に就ては修身教科書の教授がよく觸れる問題であり、實踐に至つては情意が最も深く關係すると見て差支ないものと思ふ。

情緒に就ては本能的なるものは心理學者によつて見解を異にしてゐる。恐怖、怒、愛、爭鬪等は皆本能的な情緒で之等が洗練せられて近代人の情緒を發達せしめてゐるのである。情操の意義に就ては之を說明する事は困難であるから、情緒が意志的要素を多分に含んだ時情操といふと考へて論を進める事とする。

ワットソンの論ずる如く私は、吾々人類の原始的根本的、情緒として恐怖を擧げる事に躊躇しない。しかもこの情緒は大筋運動としての走る事と關係する。この恐怖による苦痛を脫せんとして求めたのは憤怒で、この情緒から外敵に積極的行動を取らしめ、やがて石等を投げる事、棒で打つ事を經驗し始めたのであらう。更に勇氣と知力が加はつてより積極的な戰を學ぶに到つた。かくして體力の强大なことと團結力を最も必要なものたらしめたもので、團體意識も社會的意識も自然の間に育まれ來つたものである。團體遊技における協調も共同も人類の發生と共に發達し來つた共同生活に於ける精神作用である。

故に團體遊技の實施がチームを豫想せしめる事が大なればなる程、技術（筋肉運動）を練磨してチームの爲に働かんとする協調、共同の精神を發達させるのである。しかも社會が複雜になるにつれ、文化が進むにつれ、平衡の保たれた神經と制禦力ある情緒を必要とする。情緒の平衡とは本能的情緒が制禦される事であり、この制禦は筋肉活動と精神活動の相反する時、一方が禁止する事によつて調整される。

この調整されたる狀態を持つて斷えず自己を律し正しく善に向はせる時吾々は之を情操と稱し、かゝる情操と情緒の陶冶は筋肉活動と精神活動の調整に依つてのみ達し得るものである。故に苦痛と危險を必然的に伴ふ爭鬪的な團體遊技の實行の如きはこの方面より見て實に偉大なる陶冶價値を有するものである。

處がたま〳〵身體的勇氣のある者は道德的に卑怯者だと云はれる事がある。然し身體的に勇氣ある者は勘なくとも或恐怖を制禦してゐる。之が道德的に勇氣たり得ないならば、指導者が道德生活的に指導してやらない爲で罪は指導者にあると云はねばならない。

第三章　道德性陶冶と遊戲

第一節　遊戲の意義

遊戲を定義することは甚だ困難な事で其の本質に關する學說が異なるに從ひ其の意義にも相違がある。

因果的說明をなすものには勢力過剩說があり其の他は多く目的論的說明を行つてゐる。

イ、勢力過剩說――身體及精神の過剩勢力は遊戲に好都合の條件である。

ロ、休　養　說――部分的乃至輕度の疲勞は遊戲によつて回復せられるが故に遊戲は休養の爲に存在する。

ハ、訓練說（生活準備說）――遊戲は人間の本能の表現であり同時に幼兒においては、遊戲が本能の發達を促し其の方向を指示する。

ニ、反　復　說――遊戲は祖先の習慣的活動の形式に依つて行はれるもので、種族發生

の順序を個體發生の順序に反復する。

然し病氣の子供が尚遊戯を欲し、過勞しても尚遊戯を繼續せんとする如き(イ)(ロ)の欠陥であり兒童の遊戯は歴史以前の人類祖先の職業に類する點が多々ある。寧ろ次の反復説に多くの長所がある。

其他色々と説明と研究は試みられてゐるが、何れも一部分を述べてゐるにすぎない。故に之等を總合して其處に意義を見出す事を試みねばならない。

第二節　兒童の遊戯

遊戯學説は吾々に兒童の遊戯について、よき暗示を與へるが其のまゝ兒童の遊戯を定義する事は出來ない。人は社會においてのみ人たり得るといふ事は、人が價値的存在となる事が社會人となる事を意味してゐる。

嬰兒は其儘社會人でもなく同時に價値的存在でもない。然し嬰兒は發達進歩して價値的存在である社會人となる。故に嬰兒は價値的存在たる社會人となる素質を內包するが故に尊いのである。

幼時の本能的、衝動的生活は理性的な價値生活にまで高められる。故に兒童の發育につれて順次に展開して來る本能、衝動なるものは決して無意義なものではない。彼等はやがて伸びんが爲に極めて熱心に本能的、衝動的生活を營む。しかもこの生活の大部分は遊戯となつて現れる。ここに大人の遊戯とは全然其の趣を異にして考察しなければならない理由があるのである。

かくして休養説にも無理があり、反復説のみにても滿足出來ない。勢力過剩説、準備説共に充分なる滿足は得られないが反復説と準備説は共によき暗示を得へる。準備説が云ふ如く幼兒期が人間において特に長期間存在するのは、人間が他の如何なる動物よりも高等の發達を遂げねばならぬからである。「遊ばんが爲に幼年期がある。」とは確かに一面の眞理である。而してその展開の力は遺傳によつて定命されてゐるもので、吾々の祖先が營んだ行動や進化の跡を辿るもの即ち本能による ものであると云はねばならない。しかも環境から來る刺戟と交涉し、之に順應しつつ發育し進化し更に獨創する。

故に本態的に遊戯をするといふ點に於て過去を約説し、進化と獨創を內含するが故に將來の價値生活の實現體となり、實現手段ともなり得る。隨つて兒童の遊戯を教育的な立場から考へるならば、自己完成への姿であり、自己完成への道程であると謂ひ得るのである。かくて「人間は眞に全人であ

る時に遊び、遊ぶ時のみ全人間性を實現する。」（シラー）ことが兒童の生活中において眞に生命ある言葉たり得る。

第三節　教育に於ける遊戯の地位

遊戯の指導は最も本質的に行はれる教育教授の任務である。シュタイナー

この言は遊戯の教育における地位を最も簡單に述べてゐると思ふ。吾々はともする、「遊ぶ。」と言ふ言葉を非教育と同一視し、時には悪いとまで考へる事がある。勿論遊びの中には悪い分子を多分に含んでゐる。然し前述の如く兒童遊戯を考へるならば、悪いから止めよと無理解に禁止することを止めて善導すべきである。之が教育者の一つの任務でなければならぬ。

遊戯はそれ自身自發的であり情意的である。情意を重んずることを忘れた時教育は主知主義となる。主知主義的な教育が全人的陶冶として不適當であり、しかも人格の分裂を豫想させるものである事に想ひ到るとき、教育は却つて詛はしい存在となる。こゝに合科的方法による教育、遊戯化による教育、作業による教育が重視される原因があると云ひ得ると思ふ。

教育はそれが如何なる意義の下に定義され様とも、被教育を發達進歩せしめ得るといふ教育者の信念を除外して考へる事は出來ない。

人間の發達は全て其の根底において本能を考慮する。本能を考慮するとは、それを抑壓するといふ意味でなく、發展の基礎を本能に求め、之を善導して人間性を完うせんとするの謂に外ならない。本能は單に先天的に固定されたものでなく、環境の影響によつて變化し得るもので、本能なるが故に放任するといふ事は現在心理學からは認められない事である。

しかも子供は生得的に活動せんとする欲求を持つてゐる。兒童の歩距離をカーチスは歩度計によつて次の如く測定してゐる。

三才――六才の子供は一日平均　九、四哩
小學兒童は一日平均　八、八哩（土曜日は一〇、五哩）

更にヘザリントンは各年齢の兒童活動を研究して次の如き解答をしてゐる。（兒童體育心理、松井三雄氏から）

表布分動運別齡年　表一第

年齡	平均睡眠時間	大筋	手先	言語	自動	無爲
0—1						
1	9½					
2	10½					
3	11½	.....	2	.....	2	?—
4	12	.....	2	.....	2¼	?
5	12½	4½	2¼	2½	2½	?
6	12¾	4¾	2¾	2½	2½	?
7	13	5	3½	2+	2¼	?
8	13½	5½	3¼	2¼	2	?+
9	13¾	6	3¾	2+	2	?
10	14—	6	3½	2¼	2+	?
11	14	5⅔	3½	2½	2	?
12	14+	5	4	3	2	?
13	14½	4½	4	2¼	2¼	?
14	15	4+	4½	3¾	2½	?+
15	15½	4—	4¾	4	2¾	?
16	15¾	3½	4¾	4½	2¾	?
17	16—	3+	4¾	4¾	3—	?
18	16	2½	5½	5—	3	?
19	16	2	5¾	5	3	?
20	16	2	5½	5½	3	?

以上を綜合すると小學校の兒童は一日に四—五時間の大筋運動を必要とする。しかも之を充しつゝある所のものゝ凡んど全ては步行することゝ遊戲であるといひ得る。故に本能の價値と敎化の上より、又生理的な身體發育の上より見るも、遊戲時間を適當に與へる事はよりよき敎育の手段であらねばならない。

兒童は活動性を制せられた時有害な方向へと進んで行くか、さもなければ將來有用な本能を閉死させる。米國學校における遊戲は青少年の惡戲から遠ざける爲に發したとカーチスが云つてゐるが、其の間の消息を物語るもので、若し本能的活動を壓迫するならば一層惡化された代行活動を生ずるか、又は善をもせず惡をもしない活氣なき懶惰な人間を造る結果になるであらう。

故に指導せられたる良き遊戲は愉快の中に知力、體力、品性を養成し、實現する所のもので、敎育的價値を多分に持つものである。

然し元來遊戲は無意識的活動で遊戲すること其れ自身が目的である。これを敎育的に陶冶の材料に持ち來す時、發達せる遊戲は體育的、美育的、知育的、德育的等の諸價値を伴ふのである。故に之を敎育的たらしめ、より多くの價値を實現せん爲には、特に之が德育的たらんが爲には、前述せる品性陶冶と意志行爲の關係を遊戲の實行に持ち來たさねばならない。即ち遊戲の中に作業的（勞作的）分子を取入れる事によつて達し得られるのである。

從來遊戲の敎授は體操科の一分野として、體操科の時間に行はれ課外遊戲の如きも單なる名譽慾の爲に行はれつゝあつた。故に兒童は指導者の傀儡であり、手段であつた。この態度を改めて眞に敎育の爲に遊戲を情意の啓培自發性の尊重、興味の重視等の立場より、再吟味を試みねばならないのである。

遊戯化による教育も幼學年の教育方法として、しばゝ〳〵實行され研究されて來た。かゝる方法は勿論兒童性の尊重にその根柢を置くのであるが、その中心をなす所のものは自由なる綜合的なる全的なる兒童の家庭生活から學校生活への圓滑なる轉移を企劃することにあるであらう。

然し人生は遊戯ではない、自由と快樂のみが人生の目的でもない。人生々活の意義は自己の限りを盡して社會の爲に盡すことであり、社會に盡すの方法は作業(勞作)を通してのみ爲し得ると謂ふべく、隨つて學校生活への圓滑なる轉移とは遊戯的狀態から作業的(勞作的)狀態に高める事となる而しここに今一つ重要なる考慮を入れなければならない。即ち遊戯と作業との理想的狀態についてである。作業は遊戯的分子の混入によつて作業そのものに價値を認める狀態が理想であり。遊戯は作業的(目的に向つての意識的努力、實行の反省的態度)分子を多分に取入れ、しかも遊戯の狀態を脫し得ない所に理想的姿を見る。即ち全ての行動が邪なくスポーツマンシップの發現を目的に持つフエアープレイたる事を意味する。スポーツマンシップより正しく反省させられ批判せられるといふ事に外ならない。かゝる態度は即ち道徳的なる態度であり、同時に作業的態度(勞作的)であり得る。

故に遊戯を獨立した體系として之を德育的に考へるならば、遊戯から作業は生れるといふ發生的見地に立ち、同時に兒童心身の成長につれて、本能的から理性的に娯樂的（娯樂的たる事勿論大切ではある）から作業的にと進展せしめる事であり、學校において課すべき遊戯は本能的衝動的生活の純化發展を目的とするものを、作業的に勞作的に課す事でなければならない。

繰返して云へば遊戯の實行をスポーツマンシップの發現を目的とした意志的行爲たらしむる事である。而してかゝる意味を充實させる所の遊戯はチーム觀念を明瞭ならしむるものでなければならない。この點より從來行はれたる遊戯に批判を加へ改善するの必要を痛感するものである。個人的遊戯競技も勿論道徳的價値を大いに有するが、共同社會人たらしめる事を目標とする遊戯の指導においては當然、勞作が共同勞作を取る如く遊戯に於ても團體遊戯を上位におかなければならない事となる。

第四節　遊戯と仕事

前節において遊戯的狀態から圓滑に作業的狀態に持來す事が教育における遊戯を通して爲す陶冶であると云つた。

此處においては遊戯と仕事の關係を考察する事によつて、この事が價値ある陶冶である事を究明

せんとするものである。

遊戯と仕事の差違を客觀的な標準によつて決定することは甚だ困難な事で、しば〳〵行はれてゐる區別のいづれも主觀的區別である。生理的に區別せんとするものは仕事が身體及腦髓の同一部分を使用するに對し、遊戯は之等の多くの部分を活動せしめ如何なる部分も長時間使用することはないといふ。然し之も程度の相違であり、仕事と遊戯の種類によつて異なるから客觀的標準にはなり得ないのである。主觀的に決定せんとするものに次の如きものを擧げることが出來る。

リー　仕事は强制的であるから手段であるに對し遊戯はそれ自身生活であつて手段でない。

パームリー　仕事は有價物の生産の爲の努力であり、遊戯は單に快樂を得る爲の勞力消費である。

ジョンソン　仕事は習慣の結果であり、遊戯は本能の結果である。

ホール　仕事は面白くなく規則正しく勉めとしての活動であつて遊戯よりも動作の正確を必要とする。

シース　遊戯は自由な自發的なそれ自身滿足的な活動であり、仕事は反對に强制的な計畫的な必要的な活動である。

パトリック　仕事は或目的を遠せんが爲に有意注意を持續して一定の活動を行ふことであつて精神上の緊張、分析、集中努力禁止の作用を必要とするが遊戯は自發的でそれ自身の爲に行はれる。

（松井氏體育心理學から）

以上遊戯と仕事の區別は主として幼兒の所謂遊びと大人における仕事の場合を比較區別せるものの樣である。一度、現在行はれつゝある所謂遊技なるものを區別せんとする時之等の總てが理由を失ひ、只其の動機においてのみ正しく考へられると思ふ。

グリフイスは現在行はれてゐる競技の研究によつて次の如く區別してゐる。

グリフイス　遊戯はそれ自身の爲になされる筋肉運動であり、遊戯への動機は生物中に存し、唯是を行動に現すことによつてのみ滿足されるが、仕事は生物以外の或目的を獲得する爲に遂行される精神の活動乃至筋肉運動である。故にフツトボールを遊ぶことを好むが故にタックリング（仕事する）を爲す、同樣に各種の競技をそれ〴〵に好むが故に基礎的練習（仕事）をなす。

之を要するに前者においても、後者においても截然たる區別は樹たない。何れも活動における自由が兩者を區別する共通なる標準になつてゐる樣である。而してこの自由は情緒的活動と意志的活動の二性質を含む。故に活動中に情緒的性質を多分に認めれば仕事となる。

グリフイスがタックリングをもつて仕事であるとしたのはタックリングが目的活動であり隨つて意志的活動であるからである。しかもタックリングを練習することによつて、フツトボール競技は

より愉快に、より向上したゲームたり得る。この事は他の運動競技に於ても充分に信ぜられる事で、この事が遊戲が作業的分子を多分に持つ事が價値を大にする理由たり得るのである。隨つて試合は獲得したる技術（仕事の結果として）と獲得したる精神（スポーツマンシップ）發現の場所であり、同時に反省を與へる一機會として意義を持ち、又自己滿足の場面である。

故に幼兒における遊戲は兎も角として、學校において課すべき遊戲は作業的分子を含む事によつて、より價値的なものたり得るのである。

しかも勞作は單なる手段價値ではない。勞作する事それ自身に滿足を感ぜしめる事が眞の勞作であり、遊戲はスポーツマンシップを充分に意識し、之を充分に發現する爲に仕事的、勞作的態度を取らしめる事が、ゲーム自身の向上であり、同時に德育的價値を大ならしめる事となる。隨つて遊戲と仕事を截然と區別することなく兩者共に生き得る未分化的、複合的狀態を現出することが望ましい。

一見無意味の如き斷片的な幼兒の遊戲的活動も聽て複雜な勞作上の技術となり、又將來の職業的生活にも關係するものであるから、發育幼稚にして本能的生活が大部分であり興味あることのみに強き實行意志を現すといふ意味においても、兩者の協調は望ましい事であり、尙かゝる主觀的な兒

童の本性の上より、又社會人養成の立場より、小學校における遊戲の指導並に精神を根柢として、將來における正しく、しかも眞なる勞作の根柢を培ひ以て全人格陶冶を圖るべきである。

私はこの理想的なる姿を正しく行はれるスポーツの中に見出す。共同社會の根本的態度も亦チームを豫想するゲーム中に見出し得る。次にスポーツの意義を究明する事によつて本問題の確實性を捉へんとするものである。

第五節　スポーツ及びスポーツマンシップ

遊戲から發達して遊戲的分子のみによる事なく、又遊戲を全く脫し得ないものにスポーツがある。スポーツは狹義に解するとアスレチックの意味に解される事があり、普通には成人の遊戲中身體的のもので競爭的なものが云はれてゐるが、現今においては之を以て滿足なる區別の標準とする事は不可能で、之をもつて區別せんとすれば、陸上競技も單なる遊戲も戰爭も喧嘩もその區別を失つてしまふ。

スポーツの解釋に一轉機を與へたのはスタイニツアーで彼はスポーツの分析によつて一般的要素

を發見せんとしたが失敗に歸し、標準としては主觀的な活動の仕方にその基礎を有すると決論した。即ち二人以上が競爭の目的で一定の條件の下に行ふ事に一致する活動であり、社會的活動として存在するものである。故に人間活動のあらゆる部面から一つのスポーツが生れると論じてゐる。更に又心的動機として自己誇示を根本的なるものとした。隨つて外形的には身體的競爭的でしかも他よりも勝る事と內的動機即ち勝つ事であると考へた。之は吾々の常識であり、同時に凡んど全ての人に認容されてゐる事で今更云ふ迄もない事と思ふ。

然しここに一つの暗示に富む意見は、グロースの自然遊戲者とスポーツ遊戲者を分ち、後者を前者に對しより重大視してゐる事である。グロースが生活準備說を取る學者なるが故にこの意味においての重大視なる事は明である。

スポーツとしての心理的要素は遊戲への刺戟と其の悅樂が技術上の困難な問題に出來るだけ完全な方法で打勝つといふ事に存在してゐると主張してゐる。即ち技術上の困難なるものがスポーツである如く考へられる。然し動作の個人差による主觀的標準が直ちに客觀的標準を樹て得るとは思へない。

而して技術上の困難に打かつ爲には之が要求する色々の條件に從はねばならない。然らば自由なる活動である遊戲の中から、如何にしてかゝる强制が生れ、無意的動作を有意的動作たらしめるか。

勿論遊戲は如何なるものも自由なる活動である。然し一度對手を求めて技を比較し、しかも自己滿足を得んとするならば、自己內心なる善意識は自己の行動に對して批判し善なる事を要求する。之即ち人格の統一力による發展の一過程としての强制で眞なる自己の欲求である。

又一方對手たる他我もかゝる意識を自覺する。かゝる狀態は自他共通なる强制（規約）によつて共に滿足なる活動を爲さんとする欲求で、人と人の接する所社會を生じ、社會の在る所必ず社會意識を生ずる如く。この社會意識的な存在は自己の欲求であるに拘らず自己を强制するものゝ如く考へられてゐるのである。所が發達したる形式の遊戲（スポーツ）なればなる程多くの規定に拘束されてゐるのが存在の姿であり、拘束が欲求なるが故增々意識的に技術を練習して對手と比較する事が愉快になる。これは進步したる遊戲が社會的活動である一理由であり。この理想的狀態は團體としても亦團體に對する個人としても共同社會及其の成員の狀態に一致する。

而してかゝる强制はスポーツの內容からも技術上からも起り得るもので、遊戲からスポーツに變化する際の强制は技術上の困難さから來る。內容の困難さは全く仕事に變化せしめてしまふ。私は前述において遊戲が作業的勞作的となる事が理想であるといつたのは決して眞の仕事になれといふ

意味ではない。仕事と遊戯が仕揚されたる狀態の謂で其の中においては共に生かされてゐる狀態である。この狀態は試合に見るべく遊戯の强制によつて技術の習練をなす過程は一種の勞作であり仕事である。これを根柢とし、遊戯本能をも共に生かすのは即ち試合である。然し又一面吾々人間は自己の活動を最も完全なる姿において表現する事は至難であるが故に、無限なる道德的態度から行動を理想的に遂行せんとする欲求によつて增々技術の完成に努力する。かゝる目的で自己の技術を磨き、この技術をもつて他と競爭し自己滿足を得る事を目的とする運動が眞にスポーツである。

こゝに謂ふ自己滿足は自己誇示ではない。眞にスポーツマンを動かす眞劍なる姿の根柢は「或活動がほんとによく出來たい。」といふ願望に外ならない。（グリフイス）

狩獵とか魚撈がスポーツである爲には他人と收獲を競ふ事が主目的でなく捕獲する技術の中に問題を見出し、それに對して自己の技術を進めるといふ事が活動の動機となり之に向つての努力を樂むに至つて初めてフエアーなるスポーツたり得るのである。

故にスポーツに於ける記錄は自己の技術が如何なる程度に發達したかを解決する爲に重要なるものとして價値を有するので、勝つ事が主目的ならばレコードの必要はなくなるであらう。勝たねば駄目だといふ事は眞であらう。然し吾々は疲勞、苦痛、侮辱をうけ確然たる敗北にも係らず力戰して全力を盡したと云ふ潔白なる意識がある。こゝには寧ろ美しい「勝利の感激」がある。誠實なる練習と試合は例へ負けては勝利より以上に深刻なる個人的感激がある。

故に「勝て」とは二樣の解釋を有する事が屢々ある。要するに誠實なるプーレの實行に對して、より效果的なる興奮劑である。自己の技術と精神の精練が理想に近付くとき勝利は必然的に來るもので如何なる對手にも堂々と勝ち得る所まで色々の規約に服從しつゝ自己の技術を磨く、その努力の結果として記錄と勝利が限りなく尊くなる。（故に純粹なる勝利への意志はスポーツマンシップに抵觸するものでなく、かゝる考へ方と一致すると考へる事を附言しておく。）故に技術上の困難が吾々を益々努力せしめ、他の凡ての動機を排して目的を達する爲に價値ある條件に服從しつゝ困難に打ち克つことを意志せしめると共に、かくする事を樂むといふ態度が其の根本的精神となつて始めてスポーツたり得るである。

この根本的なる精神を吾々は普通にスポーツマンシップと呼んでゐる。

スポーツマンシップとは競技中の特殊なる動作を價値ある條件の下に絕對に服從しつゝ正々堂々と行ふ性格力であると云ひ得る。故に動作中に含まれてゐる善を選擇する一般的な性格であり品性である。品性なるが故に一々の行爲に對して偉大なる力を發現する。隨つて試合においては立派な

る紳士道となり得るもので、吾々の道徳實行の根柢たる所の德目である。

要するにスポーツマンシップとは個人競技においては技術練成の爲の忠誠であり、團體遊技においては團體に對する忠誠が共同心の上に顯現する時の心狀であり、行動である。參考までに非スポーツマンシップの例を揭げておく、

○パーソナルフアウルを繰返してバスケツトボールから除外されること及之を賞讃すること、

○野球のフライを取らんとしてゐる野手に對して、注意を亂す言動並にフライをミスした時の嘲聲等、

○味方にのみ聲援拍手を送ること、

○花形選手にのみ聲援すること、

○敵手に對して憎惡すること、　等

第六節　一般的德育價値

スポーツによつて養はれる諸德性を統一する所のものがスポーツマンシップであることを述べた。故にこの精神の敎養は直ちに道德的品性の陶冶たり得る。然しこの事は道德的價値が唯一であるといふ意味ではない。他の敎育的價値である諸價値についても論すべきであるが、本研究に於ては特に德育的價値に就てのみ論ずる事とした。

古來多くの敎育者は遊戯によつて感情を陶冶し有害なる衝動を去り之を健全に導くものであるといつて、鬪爭性の子供にフツトボール角力等を與へ適當な機會の許す限り探險、遊獵、釣魚其の他家畜の飼養に馴致せしむる事が出來るならば男子の亂暴なる破壞性、盜癖其の他反社會的行爲を矯正せしめる事が出來るであらうといつた。

然し遊戯の德育的價値は遊戯自身の中にも勿論含まれてゐるが、それよりも遊戯の仲間から來る場合が非常に多い。ワツトンソンが「成長する子供は他の子供から打ちのめされて眞直になる。」といつたのはこの點を述べたのである。更にチームを背後に豫想せしめる時一層大なる力となる。競技の試合は吾々の社會生活中に無くてはならないものであり、同時に競技試合はそれ〴〵特徴はあるが吾々の社會生活を實行を通して指導するものである。試合は柔和なる生活を脫し、嚴格な生活の組織の中において、自己の最善を盡すことを學ばしめる。

兒童の道德的體驗は敎室における知的作業の中においてよりも、休息時の運動場において、放課

後になす遊戲的生活の中において、より多く體驗させられるであらう。しかも兒童に取つて遊戲生活は人生の體驗の第一歩であり、この體驗が對手を求める時道德的體驗となり得る。しかも遊戲は自發的であり、隨つて活潑なる活動である。怠情は不活潑なるものゝ現れである。「小人閑居して不善をなす。」故に一つは不道德の源泉であり、一つは道德の源泉となる。而して自發活動なるが故に、その行爲に自由がある。換言すれば自律性に立脚した行爲である。故によき道德性の實踐であらねばならない。

要するによき遊戲をスポーツマンシップの統一の下に實行と反省を繰返すことは、之が直ちに道德的態度なるが故に道德的に意志を馴致し、更に習慣を形成し强固なる品性を練成せしめるといふ點に一般的な、しかも根本的な德育的價値が存在するのである。

然らばかゝる價値實現は如何なる形式の遊戲に求めるか。既にスポーツなる概念によつて內包されてゐる遊戲でなければならない事は前述した所であるが、共同社會人となる爲の遊戲としては團體遊技が個人遊技に對してよりも效果のあることは勿論であり、個人遊技も固定的なるチームの一員として活動せしむれば同樣の價値を現し得るものであると思ふ。

然しこゝに、最も注意を要する事は事實スポーツがよくない指導者によつて指導せられたる場合、又は指導者のない兒群の如き者の間に行はれた時、勝つ爲の作戰が生活上の欺瞞を敎へる結果となり、又不公正、自慢、責任逃避等の惡德になる事が屢々ある。しかも實踐上の諸德目は正しく行はれたる時、それが善であり得るもので忍耐の德も私を中心とした功利を目的とする場合、奸智に長けたものもよく人に屈し情を制し人の忍び難きを忍ぶことがあり、意志鞏固なるは又一つの德である。然し大惡人は意志鞏固にして、しかも大なる忍耐心の所有者である如く、犧牲的精神といへども只己に從屬するものゝみ愛顧するの結果は却つて正義を害する。

勇氣、果斷の如きも一歩を誤れば輕擧妄動となり、剛毅の如きも亦粗暴、粗野なる性格に變化し易い。

競爭心の誤まれる指導は他人の失敗を見て喜ぶ利己的人間を造り、鬪爭性の極端なる滿足は義憤、公憤を誤つて私的憤怒の情を募らせる。遊技はそれ自身興味的なるが故に時に極端になり、又競爭に夢中になつて反省を缺く場合が多く、尙遊技自身不道德性、非社會性を多分に持つてゐる。之等を正しく指導して德育的價値の滿足を得させる所の者は指導者である事を充分に心掛くべきである。

「街路に放てベースボールを遊ばねばならない少年、小さい裏庭の四壁の中で他の本能を滿さね

ばならぬ少年、卑賤なる境遇から、遊戯道徳と道徳行爲の觀念を求めねばならぬ少年が善良なる社會將來の爲に貢獻することは期待することが出來ぬ。」（グリフイス競技心理學二七八頁）と云つてゐるのは、指導者によつて一定の場所に於て行はれなければ充分の價値を現す事の出來ない事を物語つてゐるものである。

第七節　個人的の價値

潔白な勝利には非常な個人的滿足がある。競技會を控へての苦闘と努力は全て之にかけられてゐたのかと思はれる程勝者は愉快さうである。自己の最善が他より勝つてゐた爲に感ずる欣は完全なる歡喜の情を起さしむるものであるから、この愉悦感が人間を快活且無邪氣にし、人間に活動力を與へる。この情がやがて成人となれる際活氣横溢せる人たらしむるものである。所が不正なる手段によつて勝ち得た勝利には卑陋感と空虚な賞讃とが感ぜられるばかりである。

之に反し正々堂々と戰つて、負けた時に空虚と卑陋感があるであらうか、勿論一時的な淋しさはある。然しそれはやがて捲土重來を期する勇猛心と技術に對する強き研究心と工夫を招來する。故に如何なる敗北の苦痛も正々堂々と行つたといふスポーツマンシップと興味によつて和げられる。倘己を捨てゝチームに殉ずる赤心、苦痛と疲勞の頂點に立つてどこまでもスポーツマンシップを守る心は孟子の「自から反して直んば千萬人たりとも吾行かん。」といつた勇猛心に比肩すべきものである。しかも勝利に對する慾望の標準を高めるこの心は即ち覇氣であり、之によつて個人も社會も共に向上させられるのである。

捲土重來を期する爲には大なる忍耐心の必要を生ず。忍耐を最も純なる心狀に於て養ひ得るものは戰爭と遊技の試合であらう。蹴球試合に於ける激戰續いて延長戰等に於ける忍耐を持つてするならば、他の如何なる逆境と謂ども之を征服するの確信を得るであらう事は決して無理な推論ではない。之は即ち奮闘的精神であり進取の氣象である。働く者のみが生きる正しき權利を得べき社會の中に於て如何にこの精神が重要であるかは贅言の必要の無い程である。

又かゝるゲームの修練を得た人達の持つ確信と沈着に就ては一般に認められてゐる點である。彼等は激憤に會つても、脅迫的な危險に對しても決して狼狽しない。何んとなれば狼狽する事が如何に慘めな結果をもたらすかを餘りにもよく體驗してゐるからである。

而もこの沈着は次に最も機敏にして正確なる、善なる動作の實行を內含してゐる。故に一見反對

せる如き果斷並に機敏と沈着は遊技中においてはよく調和される。世の中が忙しくなるにつれてこの調和が重要なる徳性の一つとなる事も白明である。而して又この事は人生に對する。先見をも訓練する。

現在は人の一生の中の一挿話に過ぎない考へられる人は常に穩かな均衡ある生活をなす事の出來る人である。正しき遊技を實行する事は敗北を全體關聯中の只一つの出來事に過ぎないと考へて勝敗に拘泥しない。純心に明朗にスポーツを體驗するこの心には一つの不安もない。勝敗はゲームの一挿話にしかならないと考へる事から導き得る。

又遊技は屢々他人の正しき、美しき、誠實なる行動に對し心からなる尊敬の念を起させると共に自己の卑小なるを思はせる。「汝慢心する勿れ。」とは遊技者に屢々與へられる言葉である。正しき勝者に對して心から祝福する樣に習慣づけられる。之によつて尊敬と謙讓を教へられる。

又試合の變化に適應すべく工夫創造せしめる價値があり、而も衝動のまゝなる行動にあらずして自律的な自制的な行動を取らせる。かゝる行動の連續が遊技であると云つてもよい位である。更に又非常なる注意と緊張を要求する。

以上はスポーツマンシップの發現を目的とした遊技には必然的に要求せらるべき徳性で主として個人的な部面に屬するのであるが、これ等が社會的環境に於て實行せられるならば社會的徳育價値となり得るのである。私は人は社會の中においてのみ人たり得るといふ命題から、個人的諸徳は同時に社會的諸徳であると考へるが次章主とし社會的徳育價値に就て論ずる事とする。

第八節　社會的價値

吾々は他人と共通なる對象に働きかける時、即ち生活の必要の爲共同する時眞に社會的生活が生れる。かゝる社會生活を爲さしむる根柢に就て社會性なるものを認め、社會生活上の徳目として、誠實、正直、公平、忠誠、謙遜、禮儀、輿論尊重、自恃、自制、寛容、勇氣、同情、共同、犧牲等を擧げる事が出來る。然し一般的價値に於て論じたる如く、よくない指導者によつて指導された場合、それが直ちに善良ではあり得ない。スポーツの社會的、道徳的空虚に對する欠陷は現實的であり、決定的である。之等は中等學校以上の諸學校スポーツに於て著しい。スポーツ淨化が叫ばれるのも無理からぬ事である。然し現實的にスポーツが空虚であるからと云つて之を排すべきものではない。正しく行はれた際に受ける恩惠に對して確信を持つて望まねばならない。かゝる確信を得る

爲に社會意識と團體遊技、共同社會體として團體遊技の二方面より、團體遊戯並にチームを豫想した個人的競技に於ける態度が共同社會に對する態度なる事を明かにし、之を明にする事は社會的諸德の訓練を爲し得る事を信ずるものである。

（一）社會意識と團體的遊技

吾々の意識は如何なる意識も個人の意識を離れて存在するものではない。所が吾々の意識は個人を特質づける意識と多數の人々と共通に有する意識の二つに分析する事が出來る。この意識が同一個人の意識内に對立する時、後者は前者を威壓し拘束力として經驗せられるのが普通である。

個人が如何に知覺し、思考し、感ずるかと云ふ事は個人的事象であるが、集團に於て行はれる知覺、思惟、感じ方は拘束力によつて知覺、思惟、感じ方を學び、之をもつて生活なる現象を生む。故に社會生活における各成員の知覺、思惟、感じ方は同一なる方向を取るものである。

故に社會意識とは社會成員の心的内容の方向が同一であると各成員に自覺、意識されたものである。社會意識は文化なる語に依つても充されるが。而してかゝる意識は歴史によつて形成され、社會の統一力として個人に拘束性を發現する。

團體的遊技存立の根源に就ては、吾々祖先の原始生活中に於ける本能的社會意識（ベレイー）、祖先の系統發生の過程に獲得した所を個體發生に於て約說する（スタンレイホール）。又競爭衝動による（マグヂュール）かも知れない。結局本能に歸存する事は誰れも認める點であらう。本能的欲求から派生した原始的な遊戯はその形式内容共に最も簡單なものであるが、現在に於ける形式内容共に複雜性を持つ團體遊技も、原始的な簡單な遊戯が社會の傳統、境遇、知識の進歩によつて複雜性を加へたもので、其の根本精神に於ては同一である。

「即ち社會本能である群居本能によつて遊戯化せられた時團體遊技が生れる。更に之をチーム組織たらしむる動機並に欲求は或は競爭的、對抗的、好奇的、誇示的な心理から派生するであらうが遊技すると云ふ事實は共通な同一心理で、この欲求を滿足さす爲にはチームを組織してプレーするより外に道がないのである。

社會意識が各成員に自覺認識せられたる如くチームの成員はこの事を自覺し認識して、こゝに心的内容は同一なる方向に向つて活動を始める。固より之等の確信は個人的欲望を根柢とするであらうが、社會意識が拘束性を生じたる如くチームを組織する事によつて各成員は遊技の傳統と成員間の社會的な關係、欲望の滿足より、こゝに義務と責任を感じ、自我を犧牲にしても眞に社會我の爲

に奉ずる欲望と自覺を生ぜしめる。かくして利己的慾望に發したチーム組織の欲求は自己チームを愛する熱情に變化し、團體遊技が共同社會的存在となるのである。故に此處に於て訓練せられる共同心も犧牲的精神も共同社會に奉ずる共同心、犧牲的精神に外ならず、而も最も完全に自己の能力に應じ全我を傾注して、社會に奉ずる實踐的訓練の場所である。遊戯社會に於ける根本的な統一力はスポーツマンシップであるが故に、この精神の訓練は正しき、而も善なる社會意識に奉ずる根本的態度の教養であり、共同社會概念が社會機構の最高なる至善なる社會意識なるが故にスポーツマンシップの教養は共同社會性と相通ずるものである。

（二）　共同社會と團體的遊技

かくして團體遊技は兒童の生活を眞に共同的に實踐せしむる爲の存在となる。兒童は教訓として又讀む事によつて共同の必要をよく知つてゐるが團體遊技を行ふ事によつて眞に共同に生きねばならない事を實踐により學ぶのである。

共同社會に就てテンニースによれば、社會は人と人との意志關係によつて成立するもので、この意志を本質意志と思慮意志に分つてゐる。而して思慮意志は理論的見方の上に立ち理窟によつて統制せられたる意志であり、本質意志は純粹に意志ばかりから成立してゐるから理論の前には屈伏する惧があるが、本質意志は超理論的な所もある。故に愛に結びつけて考へるのが普通である。思慮意志によるものが共利社會であり本質意志によるものが共同社會である。故に共同社會には合理以上のものがあり、愛による結合社會である。

共同社會の第一類型は親子關係による血緣的共同社會であり、第二類型は鄕土としての地域的共同社會であり、第三の類型は宗教的共同社會である。

團體遊技は純粹には血緣的關係ではない。然し血緣的の心情の在る事は疑へない。一度チームの一員として活動した者が、そのチームを去つてから元のチームに接する心情は理窟で說明は出來ない。强ければ强いにつけ、弱ければ弱いにつれてチームを想ふ心は兄が弟を思ふ心と一致する。先輩なる者の心情を知る者は直ちに首肯し得る所であらう。傳統を守り育てんとする本質意志によつて作られた血緣的々社會である。チームを愛するの心があつて始めて理解される心情である。

第二類型として見る團體遊技チームは、學校を背景として成立するが故に地域的に結ばれたチームである。出身校を母校と云ふ心情は第二類型としての共同社會構成の精神と根本的に一致する。しかも小學校が地理的區劃による學區を持つ事はこの事を一層有利に證明するものである。

第三類型の共同社會に於ける根本的心情は「矛盾なるが故に吾克く信ず。」といふ通念による。吾々は何が故にスポーツマンシップを現顯しなければならないか。又自己を犧牲にしても尙且團體の爲に忠誠を捧げねばならぬか。個人的なる欲求から見れば明かに矛盾であらう。然し吾々はかく信じねばならない。スポーツの根本的動機は「その事がほんとによく出來たい。」といふ願望であるといつた。この心情には理窟はない。かゝる點に於て團體遊技を永續的なチーム活動として實行せしめる事は共同社會に生きる精神と方法を學ばせるものであると謂ひ得る。

故に誠意ある競技は潔白なる共同生活に導くものであり、前述せる個人的價値を奪ひ取る事物を完全に避け得るならば吾々は自己及同胞に價値ある社會生活を保證し得るのである。

尙又競技は集團間の理解を發達させる一方法である。對校試合に於ての雙方の理解、國際競技に於ける兩國の理解等はこの任務を達し得るものである。次のカーチスの報告は吾々にも參考になると思ふ。

「紐育の西部方面に於ては、久しい以前から、ユダヤ人とイタリア人との反感があつた。それで兒童は學校から歸つて來ると殆ど毎日棒や石等手當り次第の武器を持つて互に、町を上へ下へと追つ駈け合つてゐた。そして遂に警官が飛んで來て中止せねばならぬ樣な騷ぎを演ずることも屢々あつた。所がこの二つの部落の中間に遊戲場が開設された。子供等は此處に集つた。併し兩人種の子供は決して一緒に遊ぶことはしなかつた。やがてかゝる狀態を矯正せんが爲に指導者によつて一案が工夫せられた。それは五人のユダヤ人と四人のイタリヤ人とで野球チームを作つて競技させるといふ試みであつた。併し混成チームは朝組織せられたかと思ふと午後には解散してしまふといふ狀態であつた。そこで指導者は今度はもつと多人數が一緒でなくては行はれないやうな遊戲を共に行はせる事を試みた。すると次第に之に參加し、そのために六週間の後には彼等兩人種の兒童は完全に結合せられ、彼等自身の間に於てさへも、ユダヤ人であるか、イタリヤ人であるか、區別出來ない程親密になつたといふことである。」（敎育科學第一冊運動心理學三四頁）かゝる實例は其の他にも多くあると思ふが、集團間の理解が友情を生んだ一例である。

以上遊技の諸價値を兒童の社會性發展の上に體系づける時自然にして而も正しい社會性の敎育を遊技によつて爲し得ると信ずるものである。

第四章　兒童の社會性（男兒について）

兒童には兒童としての社會性がある事は誰れしも認める所である。兒童は社會性を有するものにあらずして、自己中心性なりと云ふピアゼの如きも、この自己中心性がやがて社會人としての社會性に轉移する事を認めてゐる。

兒童の社會生活は大人に對する生活と兒童同志の生活に區別せられる。所が大人は子供に對して全知全能的であるから主として權威關係であり、隨つてその交渉より兒童の社會性を見る事は一面的である。兒童の社會性は兒童と兒童との交渉の間において見得るもので、遊戯生活と喧嘩の中に最もよく現れると思ふ。遊戯も喧嘩も既に社會本能の發現と見らるべきものが非常に多い。

本能を確然と分類する事は困難な仕事であり、同時に分類は分類に止まり、又一つの本能は他の本能的傾向と複合して現實をなすものであるから共程大切な部分ではない。それよりも本能の特質が吾々に教育の暗示を與へる。

即ち特質として

（一）定期性　本能の發達には一定の時期がある。

（二）一時性　本能發現の期間に本能を起すに適當なる刺戟を欠く時は、消滅するか又は微弱となる。

（三）融通性　本能發現の初めは多くの刺戟中何れにも反應を喚起するが。固定したる後は他の刺戟との結合を排斥する。

以上の三點が本能の特質で大體六、七歳頃までに一通り芽生が揃ひ青年期に到つて完成するのである。

第一節　社會的態度

人間の社會的態度の現れは、生後四ケ月頃に發現し初め六ケ月頃になると近寄る人に對して子供の方から振り向く様になる（久保氏）所が二歳以後になると羞恥を知る。殊に三歳半より四歳半が最も屢々現れる。同情は三、四、五歳において著しく同家族が第一位を占め次で動物、他人、無生物にと及ぶが幼兒期の同情は殘忍性を伴ふものであるから眞に社會的なものと云ふ事は出來ない。之を本能的な方面から視るならば、社會を形成する所のものは群居本能であらう。兒童が社會人

らしい行動を多分に持つ最小なるものは交友の關係である。交友關係の成立に就いては實驗的結果を經ずして吾々は正しく判斷し得ると思ふ。即ち幼兒並に兒童が社會的生活を經驗するのは、遊ぶといふ事と喧嘩をする事によつて爲されるのである。

稍長じては內的な要求から話の相手を求め、仕事の相手を求める事によつて充たされてゐるといつても過言ではない。而してその根本的なる姿は遊ぶ事であり遊ぶといふ事は地域的關係による事が多い。而してこの交友關係は終には親友なる關係に發展する。かくして他の爲に自己を犧牲にする事も、眞に同情する事も敎へられるのである。

然らばこの親友成立の年齡的な關係はどんなになるか。この點については京都府師範學校附屬小學校第二敎室の研究（第五報告）鹽見訓導の研究によれば次の如くである。（京都市內明倫、七條兩小學校尋二—尋六まで）

質問「一バンナカノヨイ一人ノオトモダチト、ナカヨクナツタノハ、アナタガイクツノトキデスカ。」

答案數　男　五二一　女　四二九　計　九五〇

第一表　親友關係成立の年齡（A）

性別＼年齡		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
男	2	1	1	4	1	17	31	36	16				
	3		1		1	6	20	28	32	13			
	4					2	5	9	17	20	32	9	
	5		3	3	5	8	10	12	20	15	21	9	
子	6	1	1		4	2	9	10	10	11	28	30	7
計	521	2	6	7	13	38	79	103	98	71	58	39	7

第二表　（B）

性別＼年齡		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
女	2	1	1	1	5	10	8	51	12				
	3		2	1	4	2	21	28	22	8			
	4		2	3	4	7	10	18	20	30	5		
	5		2		3	7	7	17	17	11	16	9	
子	6				3	5	8	6	7	8	11	13	3
計	429	1	7	5	19	31	54	120	78	57	32	22	3

第二表　（C）

合計＼年齡	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
950	3	13	12	32	69	133	223	176	128	90	61	10

右の表によれば七——一〇歲までが最も多く、殊に八歲において最大である。二歲より六歲までは

漸次順調に社會性の發展をなすことを示してゐるが、七歳八歳における多數は學校生活により急激なる社會性の發展を示すものであり、第一印象なるものが親友關係に必要なるものなる事を示して居り年齢の增加と共に同一學級及同一學校内における親友關係の飽和狀態になつた事を現してゐる。

小學校に於ける親友關係は低學年に最も多く、大體三年生までに形成せられる。然し其の實質においては上學年の方が勝つてゐると考へられるし尚又小學校卒業によつて親友は一轉機をなす事も明である。然しここに面白い研究はシエルドンの研究であると思ふ。群居（社交）本能の積極的方面として、兒群の研究をなしてゐる事である。

シエルドン……（上野氏兒童心理學による）

答案數一〇二三中會合の數八六二、しかも一つ以上の團體に屬するもの六四で體育競技に屬するものは六一%次が惡戯を主としたるもの一七%でありこを年齢的に見ると、

年齢	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17（兒群とは群を作りて市中を横行するものに名付けたものである）
團體	28	44	118	155	164	188	90	80	34	11
	7%		87%						1%	

青年期に入つて減少するのは眞に社會的傾向を增す爲にこの必要がなくなることゝ、元からの團體が存續してゐる事及既成の團體の爲に滿足させられるからである。

表三　第

學年（男）	學級外	學級内
2	34%	9.5%
3	37%	9%
4	35%	17%
5	42%	18%
6	35%	13%

體育的な遊戯の團體は八歳より十三歳までに著しく增加するが其の後は文學的に集る事が大なると、尙ブツフアーの研究によれば男兒四人中三人は何等かの團體に屬して居り、一度も團體に屬しないものは十二歳では二六%、十三歳では二一%であると云つてゐる。この事は學級内における親友飽和の結果、群居性の滿足を他に求めたるもので一見相反する結果の如くして實は十三歳頃は旺盛なる社會性の發展をなすものでしかも年齢と比例するが如くに考へられる。

京都府師範學校附屬小學校第二教室辻本氏の「あなたはうちであそぶときどんな遊びが一ばんすきですか。」の問に對し答へた同校兒童（男）は三、四年においては追走（主として鬼事）三〇%對群的（團體的遊技）一五%で第一位、第二位にあり五、六年においては對群的一八%追走一二%で第一位第三位にあり第四位は投射を主としたもの一〇%である。追走は主として鬼事であり投射

はキヤツチボール等であるから、之等は皆一種の兒群といつてよい。兒童が如何に放課後休日に於て兒群をなしてゐるがよく窺はれる。更に鹽見訓導の學級內及學級外における親友關係の統計も、この事を證明してゐると思ふ。（第三表參照）

然しかゝる社交性のある一面獨居本能（羞恥）なるものも認められる。既に三—四歳にしてこの發達がある事を述べた。この本能性は非社會性にあらずして、むしろ社會性の消極的部面と見る事が妥當であると考へる。

尙之と關聯して誇示と自卑なる生得的傾向がある。自卑は吾々の反省力によるもので、其の發達は生活現象に直面する事と知的內容の豊富さに比例して發達すべく、やがて獨を慨み、自己を社會の爲に否定(?)して眞の社會我に生きる根本をなす。誇示は社會の爲に進んで事をなす性質となるが、社會の拘束性によつて反省を與へられて眞の社會人たり得るに到る。

尙社會性に關係深きものに同情と献身がある。同情の根本的なるものは養護本能によるものであらうが、極幼少な時には反射同情として現れる。（又は偽同情）これは自己と自己以外のものとの分化が行はれてゐない爲、即ち自己が發達してゐないからである。同情は又他人を理會することによつて生ずる。「カークパトリツクは七——十二歳までを競爭的社會化時代といつてゐるが十歳以後には利己的個人的傾向が抑壓されて他人を顧慮し集團生活の福祉を省る樣になる。」（久保氏）

この事を裏書する興味ある研究はゲーツの表情理解の年齢的研究である。

（この實驗は寫眞を見せ各年齢に屬する子供の約四分の三によつて正しく解釋された反應を表示したものである。久保氏兒童心理學から）

同情の發達と羞恥の發達は稍平行的である。他人を知り社會を知ると單調なる行動をさけて團體的趣味行動に迎合するやうになり、教師友人の不承認を恐れる所から社會性として必要なる共同規律、整頓正直、公平等の美德が發達する。

献身は自己の屬する群居團が他から攻撃を受けたとき起る所の生得的傾向で社會發達の爲に欠くべからざるものである。この傾向の發展が又犧牲的精神を作るのであるが共同感の確立しない所には、

表四第

年齢	表情ノ種類
3—4歳	樂しみ，哄笑，喜び．
6—7歳	憤怒，激怒，痛苦，苦惱．
8歳	恐怖，驚駭，戰慄．
10歳	輕侮．
11歳	憐憫，同情，嘲笑．
12歳	驚愕．
成人	驚嘆，嘆美，猜疑．

この精神の發達は望まれない。

以上擧げたる如き生得的傾向及社會本能と競爭本能が合して運動競技を作つたのである。故にかゝる點より見るも遊技が如何によく德育的たり得るかといふ事が解る。

尙此處に注意しなければならないものに喧嘩がある。喧嘩は自己保存の本能による鬪爭本能に芽生えたものであるが、その現象は明かに兒童の社會的一面である。しかも鬪爭の形式中その部分々々は遊戯の中に織込まれて存在してゐる。古來亂暴なる子供にフツトボール等を與へて救濟法を講じたる如く、又今も尙かく信ぜられてゐる事は本能の特質が證明するものである。鬪爭は總べての人間に强烈に存在してゐる傾向であつて、之は他の本能的傾向が外から妨げられた時、この妨害に打勝たんとして現れるもので、七、八歲に到ると身體の發育と共に喧嘩、毆合が多くなる。之を善用する（社會の爲に使用せしむる）と、ここに公憤、義憤として發展するのである。この本能も亦自己意識が强烈になる事に深く關係してゐる。憤怒は入學當時は自己中心的傾向が大であり、しかも集團生活に慣れてゐない爲、自己の要求が達せられない時、又自己を妨害するものに對して非常に怒る。入學當初は泣かされてゐる子供を見ても先生に告げるのに、告げる子供は怒つてゐない。それが一年も終り頃になると自分の親しい者、近隣の者が他より侮辱を受けた際は自身の問題の如く職員室へかけ込んで告げる。即ち明瞭に社會的精神の發達を示す。それが三、四年頃になると告げる事を止めて直ちに制裁せんとする傾向を現し、同時に對級的な感情もかなり高まつて來る。

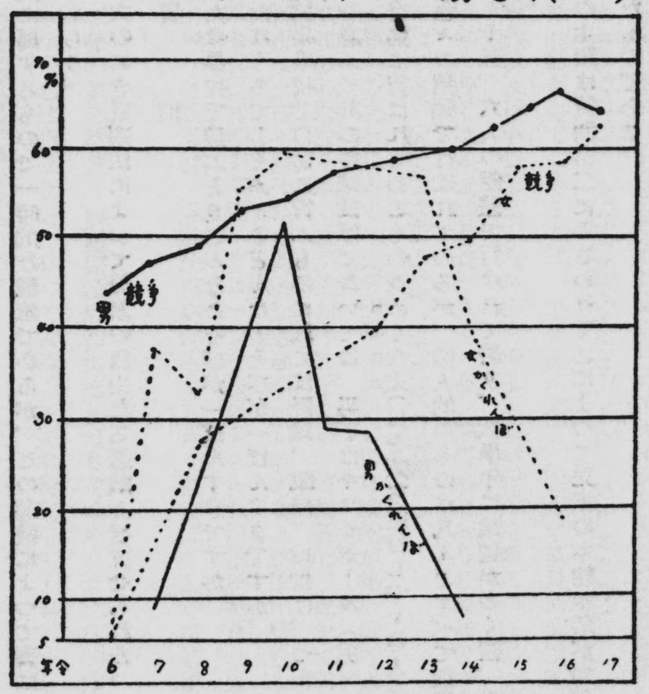
對級的に競技の試合を好むと同時に自分達が負けると見た時には試合を回避せんとする。かつて私は一年生の小さい方の組（七歲兒）を擔任した事がある。圓形リレーを行ふのに一年の時は如何に負けてもよろこんで他の（八歲兒）組と試合したが、二年に及んでは明かに回避しその理由として「負けるからいやです。」といつた。しかも彼等は其の後盛んにリレーを行ふ事を要求した。そして彼等は理由として隣の組に負けたくないからといつた。團體的な憤怒が現れてゐる事は明である。大體四年頃までは對學級的範圍に止るが、五、六年になると對校的行動に興味を有する樣になり、吾校の名譽の爲にと强く考へる樣になる。かゝる行動を英雄的行動かの如く考へる。然し一方、不利なる者が鬱憤を晴らさんが爲に團結して行動を企劃する事がある。學校選手の運動場專用に對して不平をいひ、終には中傷する樣な結果もある。かゝる時期において他人に公平を要求すると共に自己も亦公平に行動する社會的精神の確立を爲すべきである。

第二節　兒童遊戯より社會性を觀る

競爭を好む事も一般に認められたる競爭本能によるもので、鬪爭本能と同じく、それ自身本能である他の活動と結合してのみ現れる第二次的なものである。運動は凡べてその仕方によつては競爭的になるものであるから、兒童は遊戯を爲す事によつて非常に多くの競爭をなし、この本能の滿足と成長を爲す。この本能は其の他道德・學問・藝術等の方面でも有效に使用することが出來る。然しこの傾向が過度に發達すると却つて他人の成功を惡み、失敗を喜ぶ樣な結果となり、屢々共同を破壞する樣になる。故に遊戯の動機を單に物質的又は身體的方面にのみ限ることなく、之を道德的に善用する事は望ましい事である。競爭本能を群居本能に結合し、個人的競爭から團體的競爭に進歩せしめ、之によつて共同犧牲の精神を培ふべきである。

兒童は遊戯中において如何にこの本能を充しつゝあるかに就てはマクギーの次の如き觀察はかなり興味ある事と思ふ。第五表によれば男兒は女兒に比し既に六才にして競爭遊戯を盛んに行ふ樣になり、其の後餘り多くは發達しない。表中かくれんぼの行はれる頻數曲線が示されてゐるが、本遊

第五表　遊戯中に於ける競爭遊戯（マクギー）



戯は狩獵本能に屬するもので一時的な現象であるが、この遊戯によつて養はれる個人的德性は精密性判斷力等であらう。

尙辻本氏は次の如き質問法によつて兒童の自由なる遊戯を研究せられた。

質　問

1、あなたは學校で遊ぶときどんなあそびが一ばんすきですか。

2、あなたはうちであそぶときどんなあそびが一ばんすきですか。

右の質問の結果學校で自由に行ふものに就ては野球、蹴球、球投げ、つかまい、鬼事、なわとび等である。之を思ふに其の中球投げにおいては、男子はキツチボール（男）女はドツチボール等であり、鬼事は普通に行はれてゐるもの及めくら鬼（目を閉ぢ逆行しつゝ他人を捕へるもの）なわとびは女子に多く色々の種類で行はれてゐるが、個人的のものは凡んどすべて競爭の型を取り、其の他は四―五人から十五、六人の團體で行はれて居り、低學年は跳越が多く四、五、六年においては逆跳が最も多い。

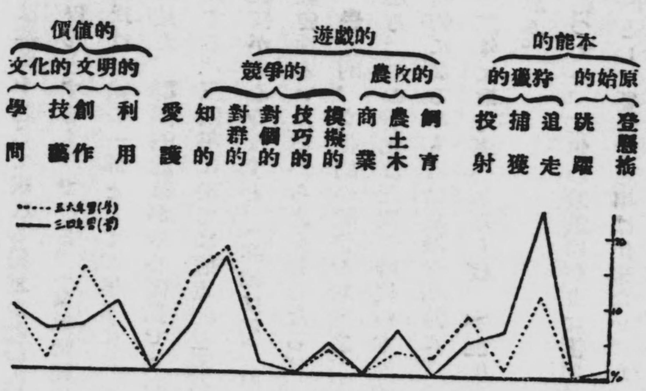
同氏の研究の主眼は質問第二にあるわけで之によつて兒童の本能生活が如何に價値化されて行くかを見んとしたものである。

私は遊戯を通じて現れる兒童の社會性がどんなであるかの研究から遊戯の材料と其の取扱方の暗示を得んとするものである。（京都師範兒童尋三以上男の統計表次頁參照）

同氏は結論の一部として、男子には「遊ぶ時は之だ。」といふ風に遊び方が比較的定まつてゐる樣に見え、群團的競技が中心衝動で其の代表的なものが野球である。又男子は工夫をこらして制作を欲する。三四年に於ては追走的遊戯が優位にあり團體的なるものは次位であるが、五六年では團體競技が中心をなすと。（詳細は第二教室、第五報告參照。）

社會性といふ點から之を見るならば三四年においては狩獵的が第一位であり、次で對群的、文明的、農牧的、文化的の順位を取り之が五六年に於て第一位對群的、次で文明的狩獵的文化的の順位となる。この變化は三四年時代の本能的なる部面が對群的なる競爭に變化したと見るべく、又一方文明的になる事も自己意識を明瞭にする一つの道程で社會性の進歩が考へられる。この關係を假りに一二年に取て考へるならば、本能的部面がもつと多く社會性としては進歩幼稚なるものであらうと思ふ。

隨つて一、二年の遊戯は假りに團體的に行ふとしてもその中心は本能的部面にあつて共同を中心目的として要求する事は出來ない。かつて私は二年生に對列フツトボールを行はしめた。眞に團體



行動を心要とする本遊戯は色々と方法を變更したが終に失敗に歸した。それに比し本能的な遊戯鬼と獵師等は非常によろこばれたものである。綴方の題材として、この遊戯を取つた者は餘り多くはなかつたが、それは行動の變化が多い爲に書き得なかつたものと思ふ。一兒童文を左に記しておく。

うさぎとれうし　　尋二　M・A

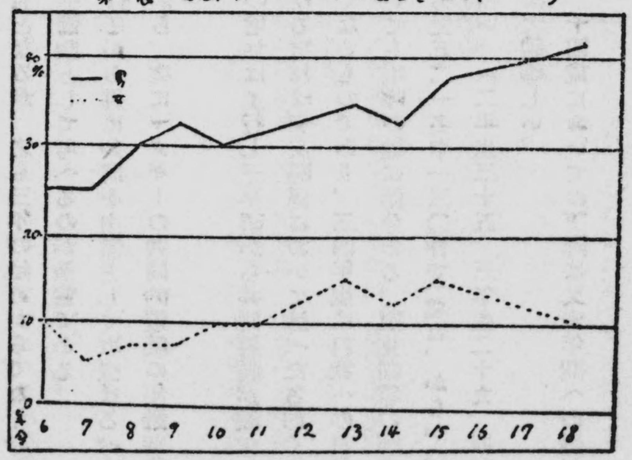
「あつまれ。」

私らは先生のこゑをきいて、すぐにあつまりました。先生はばんごうといはれました。向ふの方から「一、二、三。一、二、三」ときこえてきました。私は三ばんでしたのでうさぎになりました私ははじめうさぎ小屋の中に居ました。小川先生が「今日は、よい天氣でお日樣があたつてゐるから、うさぎはみんな外へ出ました。」といはれたのですぐ小屋からとび出した。小屋の外にはれ

うしがたくさん居ました。私はもうむちゆうになつて、はしりまはりました。けれどもとうとうつかまつてしまつたので、私はれうしになつたのです。そこらにうさぎは居やしないかとおもつて見ますと、みんな小屋の中へ入つてゐます。小川先生だけが出て居られたので。私はつかんだといふと、小川先生は「しもた。」といはれました。先生又うさぎになりました。こんなことをしてゐると「カンカンカンカン」とりんがなりました。先生は又あつまれといはれました。そして、「もう一ぺんいい氣をつけが出來たら、おしまひにしませう。」といはれました。うさぎとれうしはほんとうにおもしろいゆうぎでした。

三四年の頃は所謂過渡期とも見るべき時代であるから、社會性を多分に持つ遊戯を團體

第七表　遊戯中に於ける共同遊戯の勃興（マクギー）



共同を中心とする取扱方によつて實行せしめる事が可能となるが、之も三年の始めからでなくむしろ四年生頃から追々增加すべきであらう。三年迄位は準備期として考へるのが至當である。

五、六年にもなれば凡んど團體的に行ふ遊戯が好まれるから眞に共同を主體として取扱はるべきである。この問題については後また詳述する筈であるから、次にマクギーの共同的遊戯の年齢別表によつて尙社會性發展を考察する事とする。

第七表によると一、二年生に於ては學年の進歩と其の增加は並行し三年頃から共同遊戯が減少し後六年生までは順調に增加してゐる。一、二年生における增加は交友關係において述べたる如く入學當初親友を作るが故に其關係より、友を持つ遊が多くなるものであり、三四年生は自我への目覺めの爲に利己的傾向を現し我儘となる。學校生活においても喧嘩の數は隨分ある。鹽見訓導の調査によると、一授業日中（昭和五年九月十日）に於ける男兒五二一名中一三〇件で「惡口、からかひ」が最も多く、喧嘩の數に於ては六ケ年中二年生は特に多い。（二年生三十五、三年生二十九、四年生二十、五年生十七、六年十六である。各學年共人員は大體等しい。）

こうした態度がかくカープを下げたものと見るべく、十四歳においての下降は又青年期への發展を意味するものではないであらうか。

私は次に進んで團體遊技中の共同なるものを兒童は如何に見てゐるか。この點に就て次に述べる事とした。

第三節　遊戯内に於ける社會性を觀る

團體遊技の實行について兒童はどんな見方をし、どんな所に興味を持つてゐるかは、指導者を異にし、場所を異にする兒童を對象としての研究は至難の事である。

而も經驗少なき私が質問法によつたものであるから、絶體の眞は置く事が出來ない。この方面研究の一參考として左に揭げる。被驗兒童は京都府下中舞鶴、西院、京師附屬の尋二以上の男兒に試みたものである。

質　問　（一）

「アナタハヤキュウノシアヒヲミタコトガアリマスカ。ソノトキ、ドンナコトガ一バンオモシロカツタデスカ。」

兒童の答。

兒童の答は隨分多數であつたが大體において三名以上が同一答を書いたものは殘し、一名だけの者は其の他として合計した。部分的な物としては、打つ事、盜壘すること、失敗を見て面白いと思つた。非常な熱戰並に共同に屬するもの等に分類した。

○打つ事に合一させた答の主なるもの—打つ事、ホームラン、ヒツト、滿壘の時に打つ等。

○盜壘——すべりこみ、ぼうけん、盜壘等。

○共同——熱戰、共同してやつてゐる所、挾撃、ダブルプレー等。

○失敗——三振、オーバーランによるアウト、牽制球で倒される所

ひつくりかへつて轉ぶこと、ボールを落したりぬかしたり

する事等

其の他は何れも一—二名の解答であつたから一括した。

第八表

	計	其ノ他	相球	ピッチャー球	失敗	共同	盜壘	打つ
尋二	九〇	三	六	六	一二	〇	二八	三五
尋三	八九	三	五	三	一八	〇	二五	三五
尋四	八七	二	六	一	一六	二	一七	四三
尋五	一一一	三	三	〇	一一	一一	三二	五〇
尋六	一一三	四	一	一	二三	二六	一四	四四
高一	九五	四	〇	〇	一三	一一	一二	四五
高二	七三	五	〇	〇	一〇	二	九	三一

之を百分比によつて示せば次の通りである。

學年	其ノ他	相球	ピッチャー球	失敗	共同	盜壘	打つ
尋二	三%	七%	七%	一三%	〇	三一%	三九%
尋三	三%	六%	三%	二〇%	〇	二七%	三九%
尋四	二%	七%	一%	一八%	三%	三〇%	四九%
尋五	三%	三%	〇	一〇%	一一%	二九%	四四%
尋六	四%	〇	〇	一一%	二四%	一二%	三九%
高一	四%	〇	〇	一四%	二二%	一三%	四八%
高二	七%	〇	〇	一〇%	二九%	一二%	四二%

尋四迄の兒童には共同的な興味は見られない。全てが個々の運動に限られてゐる。この事は彼等が團體遊技（野球を全體關聯において觀得ない事を示すもので、チーム活動を全體關聯として見得ない間は社會的活動は望まれないであらう。尋五以上に於ける進歩は順調である。非社會性と見るべき失敗を見てよろこぶ兒童はかなり多く學年的には不定である。

參考質問として「アナタハヤキユヲスルノニナニガシテミタイデスカ。」これに對して事柄と理由を述べさせた所、低學年程誇示的な場合が多く現れた。投手になりたいのは之であり、ホームランを打ちたい等も其の理由は人からほめられるからと答へる。これが高學年になるにつれて責任回避的な傾向が現はれ來る。即ちライトを希望する。その理由として球が來ないからと解答してゐる責任回避はスポーツマンシップでない。進んで責任を受ける兒童の養成を計りたいものである。責任感が多くの社會諸德に對して劣位にあることは次の表によつても明となる。

質　問（二、三、四）

（二）、ヤキユウヲスルニハッギニカイテアルウチデドレガ一バンタイセツダトオモヒマスカ。一バンタイセツダトオモフノニ一ツダケ○ヲッケテクダサイ。

（イ）、ヨクウツコト、　（ロ）、ミンナガココロヲアハセテヤルコト、　（ハ）、ヨクハシルコト、

（ニ）、ヨクナゲルコト、　（ホ）、ヨクツカムコト、

（三）、ヤキユウノシアヒデボールガトンデキタトキ、ッカマウトオモッタガ、ニガシテシマイマシタ。（ミスシタノデス）コノ人ハッギニカイテアルウチノドレヲオモッタカト、アナタハオモヒマスカ。アナタガホントニオモフノニ○ヲッケテクダサイ。

（イ）、ムツカシイノダカラシカタガナイ。

（ロ）、ミンナノ人ニスマナイ。

（ハ）、アンナコトガデキナクテクヤシイ。

（四）、アルクミニヒトリダケトテモハシレナイ人ガアルノデ、コノ人ガクルトイッデモ、アカシロフタクミニワカレテスルリレーニマケマス。コンナ人ガジブンノクミヘキタラアナタハドンナニオモヒマスカ。ツギニカイテアルウチアナタガオモフノニ一ツダケ○ヲッケテクダサイ。

（イ）、アノ人ガキタラコマル。

（ロ）、アノ人ダケハヤメサセタラヨイ。

（ハ）、アノ人ガキタラミンナヨケイニキバリマス。

質問（二）に於ては（ロ）を解答したるものを以つて共同心の動きを見んとし、質問（三）は（ロ）を解答したるものによつて責任感を見、質問（四）は（ハ）を解答したるものを以つて相互扶助の

精神發達を見んとした企である。

兒童正答數の割合（第十表）

	等二	等三	等四	等五	等六	高一	高二
質問（二）	二一%	七〇%	八八%	九六%	一〇〇%	九五%	一〇〇%
同（三）	四〇%	六一%	七四%	七二%	七五%	七五%	八六%
同（四）	六〇%	七六%	八九%	九九%	九六%	九三%	一〇〇%

この結果によつて見れば共同心は速かに發達するが、責任感は發達が鈍い。相互扶助的な考へ方は共同心と平行的に發達し學年的に特に著るしい變化を見ず順調に進歩してゐる。然し等二より等三にかけての進歩と高二に於ける發達は稍顯著である。前者は自覺的傾向の現れを示し、後者は全く青年期への轉換を物語つてゐるものではないであらうか。

責任感が低いと見るその理由は利己的解答を書き易からしめた問題提出にもあらうが、學校生活に於ては眞に責任ある行動を爲すべく、共同及相互扶助の様に切實でない事を物語つてゐるものと思ふ。隨つてチームを豫想せしめる個人競技並に稍々固定的なチームを編成し、その一員として活動せしめる様な、團體遊技及其の實行に對する組織を必要とする。

第五章　兒童の遊戯期と其の取扱方針

兒童の遊戯については其の數極めて多く、ジョンソンは五七五を擧げてゐるが、今までの研究の多くは自己の立論上の便宜より之等を分類してゐるのである。從つて其の分類は實に區々である。關氏は次の様に分類して居られる。

人類進化の時代別　是に相當する兒童の遊戯

一、動物時代
1、模倣運動
2、登攀運動
3、振搖運動
4、垂下運動
5、水掻運動

二、野蠻時代
1、狩獵的遊戯
2、鬼事遊戯
3、迷藏

4、標的に關する遊戲
5、打棒運動
1、動植物愛好
2、駈　走
3、園圃に關する遊戲
1、人　形
2、造　庭
3、砂　掘
4、粘土細工
1、團體遊戲　（兒童學原論）

以上の分類は一般的に反復說を考察の根柢に置いたものである。故に私の云はんとする社會性の反復も當然この中に含まれてゐるのであるが、考察の便宜上特に取出して考へる事とする。

社會性の發展は之を文明發生史に視點を置く事によつて正しく認識し得ると思ふ。人類の社會生活において重要なるものは其の經濟生活であり、經濟生活は精神生活と相倚相扶けて一層の幸福と繁榮に導かうとする共同精神の展開で、文明史の基礎をなすものであることは否めない。隨つて社會性の發展は經濟的生活によつて始まつたと考へられる。文明史は普通には、狩獵時代、牧畜時代、農業時代、又は食料採集時代、食料生産時代、食料製造時代等と分つてゐる。この分類はともかくとして、前分類における野蠻時代即ち狩獵時代の傾向である迷藏が第五表に於けるが如く三、四年に最も多く現れ又第八表によつて團體遊戲を全體關聯として見得ないと述べた點等より、三、四年は未だ團體遊戲を行ふべく發達してゐない事を現すものではないであらうか。遊戲期の研究に就ては種々なる意見が樹てられてゐるが、結局遊戲が全的活動である事と、個人の本能發現とその環境の相違から非常な相違が起る事から考へて、外見的觀察によつてのみ遊戲期を定める事は出來ない。この點は兒童に模倣性の強い點から見ても首肯される事である。然し模倣性の強い事は直ちに他人の態度なり、精神を正しく受取つてゐるといふ論證にはならない、子供が野球の技術が行へる事は野球そのものを理解してゐるとは斷定出來ない。

以上の樣な理由から遊戲期を決定する事は困難であるが一般的には六、七歲を一つの轉換期と見る點、九、十歲を過渡期の高潮と見る、十二、三歲を又一轉換期とする考へ方は一致する樣である。

第一の轉換期は主として學校生活によるものであらうし、第二は自己意識の發達から影響され、第三の轉換は青年期へ入らんとする爲の轉換であると考へられる。この中最も不明瞭なのは第二轉

換であらう。然しこの點も前述せる三、四年時代の特質から考へて誤りでない事と思ふ。

入學以前の子供は他の子供と一緒に遊ぶ事はあつても個人的である。この事は子供の遊戯を少し觀察すれば容易に判斷されることであり、この傾向は個人によつて非常な違ひはあるが、漸次變化して群的に、共同的にと變化し、大人の遊戯に到つては又個人的傾向を多く取るに到る。

社會性を充實させる遊戯は當然この經過を取つて進展すべきものである事は議論の餘地のない所であらう。レーマンは遊戯期の研究の結果、特に遊戯活動が個人的又は社會的と指示し得る年齡が發見されないと報告してゐるが、之は實驗によるまでの事はなく明な事で、外見的な觀察からは得られない事である。この點前節に述べた遊戯の內容から見た結果はかなり信用されて然るべきものではなからうか。又一面むしろ區別の無い事が吾々實際家が自由の立場に立ち得る許されたる場面であるとも考へられる。文化の遺產を受容させる事のみが教育ではない。屢々論じたる如く社會人を養成するといふ事によつて個人としても滿足させ得るが故に社會的道德の徹底は同時に個人的道德をも完成せしめる。其の根本的なる心情はスポーツマンシップの顯現たるフエアープレーの心情である。

共同社會人の養成が教育の目標であり、道德が客觀的立場を取る事が望ましい現代文化の中に於ては、より多くよりよく、出來るだけ速かに社會的陶冶をなすべきであると思ふ。

只此處に注意すべき事は飛躍を愼むべきである。本能的に見て個人的に群的に共同的にと進展する社會性を其の時々充分滿足させる遊戯を與へ然る後次の段階にと進むべきである。

第一節　一年生より三年生まで（七——九歳）

以上社會性の上より兒童の遊戯期を見るに尋常小學校の時代を前期と後期に分ち、その上に高等科を加へた三期に分つ事が妥當であると云つた。この分け方についても確然たるものが存在する釋ではないが他の心理學上の問題並に身體發育において同一類型にある事が親はれる。

他の方面より七—九歳までの頃の發育の大體は、前期に比し身體發育の遲緩期である。個人によつて時期に多少の相違はあるが必ず停滯期が現れる。しかもこの期の病氣は兒童病型から成人病型に移行する。腦髓の發育の如きも八歳を前後として十分なる重量に達する。推理力は薄弱で暗示と比喩とによつて助けられる事が非常に多く模倣性は漸次薄らいでは行くが尙甚だ旺盛な時期である。精神生活に於ける感覺的運動的傾向は引續き優勢に現れてゐる。然し前期においては活動そのも

のに興味を持つたのであるがこの期に入ると結果に就ての興味に變り、熟練と競爭の興味が大となる。然し未だ眞に共同的でないが、形式的には後半の時期に到れば團體としての行動に興味を感じ、形式と規則に從つての行動をかなり爲し得る。然し弱者をいぢめる事はこの期においては普通の事である。

この時期は停滯期といふよりは寧ろ調整期であり、身體的にも精神的にも根本的な變化を必要とする時期で自己の不完全を認識する事によつて自己意識を明瞭にする時代である。かくて次の調整へと滑かに移行するまでは無自信の時代であるから正しき規範を與へて、之に服從さすべき時代である。この時代に從順であるべき性格の陶冶を充分に考へてやらなければならない。何事によらず「かくすべし。かくあるべし。」と云ふべき時代である。

かゝる特徵よりこの期の遊戲について關寬之氏は價値ある遊戲は無限な變化に富み、結果に興味あるもので、簡單な競爭遊戲、傳承的競技、狩獵遊戲、構成遊戲、無數の普通物品及玩具であると述べられてゐる。（この分類は教授の實際に應用したる兒童心理學に據る。）尙この外に精神作用を含む所の遊戲も加味され、內容においても形式においても成るべく多くの遊戲が與へられる事が望ましい。

身體活動の本能的、自由發動的な部面として、攀ぢる、投る、打つ、蹴る、走る、跳ぶ、平衡を保つ、搖る、轉ぶ、もぐ、滑る、游ぐ等の形式を競爭化し、狩獵遊戲化して與へ、尙之等を滿足さすべき用具の設備によつて個人的に滿足を與へねばならない。かくして筋肉動作と知覺的判斷との呼應を發達させるべきである。

要するにこの期においては社會性の發達を目的として學級又は學年を一單位とし遊戲を課す場合は、其の中心を種々なる形式を含んだ自由遊戲と簡單なる競爭遊戲を其の中心とすべきである。其の他の遊戲に就ては各教科に於ける遊戲化の教育によつて達すべきである。體操科に於ける體操の遊戲化は競爭させる事が唯一の方法でなく、聯想作用を利用して、兒童の心狀の欲求に合致させることが、よりよき方法である。

第二節　四年生より六年生まで（十——十二歲）

この期の兒童は身體の成長は急速ではなく、又腦の發育も略々止まり機能の上に大なる進步を認めない。疾病に對する抵抗力は大であり疲勞も割合に少ない時期である。精神系統の方面では前期

の發達の緒にあつた筋肉動作と知覺的判斷との呼應は深さと廣さを有する様になる。故に習慣形成の上より見る時は實に重大なる時期であるといはねばならない。

推理方面に於ては批評的傾向を取る様に成り、觀察は緻密となり、想像も進歩し、友人からの暗示に對して敏感となる。未だ主我的態度ではあるが社會的興味を起す時期である。兒群の發達に於ける、又團體遊戲の觀察に於ける傾向は明かにこの方面の發達を示してゐるものである。

遊戲は競爭に對する興味が絶頂に達する時であり、しかも其の興味は非共同的遊技から共同的遊技に轉ずる。其の他蒐集（發見の形式）の興味等は絶頂に達する。遊技の數から見て非常に多く、特に練習を要する技術的な共同的な傾向を示す様になる。然しこの期の初めにおいては尙個人的な部面が主をなし、次で群的に更に共同的にとなる。私は五月二十七日本校小運動會（全校の兒童を學級別に赤白別に分けて採點して勝敗を決する方法を取る）に於て尋六男を赤白に分ち、一名の主將を互選せしめ、ボートボール・ランニング（四チーム）赤白リレー（一チーム）八名の三競技を行はせ、全ての作戰を主將と各部員によつて相談せしめて、當日行つた所、彼等は非常に興味を持ち一糸亂れず行動した。然し前日及當日の朝各個人としては、かなりの不平を持つてゐた。數くも三分の一はこんな兒童があつたであらう。彼等は自己の技術上の問題から不平を云つたのかも知れないが、兎に角動機の中に個人的な欲求があつた事は否めない。かゝる方法が著し四年生に課されたとしたならば寧ろ不可能であり、五年生に於ても指導者の援助を必要とした事と思ふ。この事は六年に於ても共同的・自治的なるが如くにして尙眞に共同的であり得ない一例である。

故にこの期の遊戲は自由なる遊戲形式並に狩獵遊戲投射遊戲等を群的に共同的にと行はせる事が其の中心をなすべきである。遊技の數は多い方がよく、未だ二、三の遊戲を特定して行ふべき時代ではない。然し學年の進むにつれて數の減少して行く事は當然である。六年も後期においては純粹に共同的なる方面に向はせる得る事を信ずる。

第三節　六年——高等科（十三——十五歲）

十二歲の頃は競爭が中心になるので社會觀念は一時休止して不定な調和期であつたが、之を經過した兒童は新らしい觀念のもとに遊戲を行ふ。（關氏）

身體的にも發育最も急速な時期であり、腦はその重量に於ては著しくは增加しないが構造は非常な進歩をなす。

特に感精情緒の發育が目覺しく發達し、模倣暗示は同僚からの影響に敏感なると同時に成人の言行からの影響も敏感となり、感受性を增し稱揚や嘲笑に對し氣をつけること甚だしく、宗教に對しても感受性は著しくなる。第四表による表情理解によつても、この事は明である。

團體やクラブを造る傾向が强く現れ對抗及共同の遊技に大なる興味を持つ、（兒群の研究三五頁參照）故にチームゲームの練習と試合によつて個人的活動を社會的團體に關係させ社會意識を益々濃厚ならしむる樣に心掛けねばならない。

しかも前述せる如くこの期においては特に遊戲の數を減じ一つの遊戲に熱中する樣になる。故にチームゲームの指導は特に重要な部面を占めるのである。

第六章　現行遊戲の批判

遊戲期の研究に依て粗雜ながらに遊戲教材選定の標準とも云ふべきものを探究し得た。この點より現在課されつゝある遊戲について批判し建設を圖らんとするものである。然し今日に於て課されつゝある多くのものは先づ體操科要目に示されてゐるものであらう事を考へ、主として之について批判せんとするものである。然し體操科要目の遊戲は體育の手段として取られてゐるものであるから、かゝる批判は或は當を得たるものでないかも知れないが、しばらくこの問題を考へず主として德育的に考察する。教育は德育を根柢としなければならないと云ふ點からすれば、却つて正しい方法であるとも考へられる。要目に示されてゐる競爭遊戲は團體的なる性質といふよりも、むしろ個人的性質によるものであり、社會性の陶冶から見るならば團體的遊戲をなす所の基礎技術並に精神の準備的遊戲である。故に批判する中心は本能の上にあるものであり、球技は進步せる社會生活の所產であるから、其の遊戲の持つ不道德性を改善する所に存する。

従つて私のこの企は個人的遊戲時代には本能の滿足と純化を目的とする爲に考察し、群的共同的

なる遊戯時代には本能の自由なる滿足と云ふよりも、主として本能の抑制によつてスポーツマンシップの顯現を希ふものである。

一般的に要目遊戯の批難される所は、本能の充分なる滿足が與へられて居ない點、次に共同團體を作り上げる爲に焦り過ぎて居る點である。眞に共同性の現れない二年生兒童等に「對列フツトボール」を行はせてゐるが如きは其の一例であり、又實際家は之を忠實に行はせんとするから、此處に無理を生じ興味を削減せしめ、眞にプレーする熱意を失はせる。かゝる結果が如何に不道德性を釀すかは兒童の遊戯を一見すれば明かになる。批判せんとする遊戯の內容、形式は要目に示してゐないから、體育研究所著作學校體操解說による事として。然し紙面の都合上解說を載せる事を得ず且つ補充教材に就ても斷片的に述べたばかりで系統的に述べ得なかつた事を遺憾とする。

第一節　尋一——尋三

（一）競走遊戯

◇整列競爭

1、遊戯と云ふには餘りに體操科の手段化されすぎてゐる。

2、普通には一學級が二分されて行はれるが、かゝる大きな團體に於ける共同は一年の初期には不可能である。

3、若し團體的遊戯とするならば、勝敗の標準が主觀的となるからよくない。競爭化を圖らなくても充分に効果を擧げ得る。

4、幼稚な子供を競爭によつて刺戟し過ぎる事は充分考慮しなればならない。

5、假りに行はせるとしても、この逆の方法によつて行はせる事も面白い事である。即ち整列から解散して一定巨離の圓內に集合させるのである。

◇旗　取

1、既に狩獵遊戯の現れを持つ兒童が現れてゐるから、その初期のものとして、動かない旗を持つて來た事はよいと思ふ。

2、行はせる方法として二通り考へ得る。即ち個人的な競爭とするか、團體的に行はせるかである。後者は團體的な狩獵遊戯になり、一年生としては未だその時期でない。時に團體的なるものを加味して行ひ、漸次修練することを圖るべきである。

3、個人的なる場合も、團體的なる場合も、共に兒童數よりも旗の數を多くして行はせ、奪ひ合を防ぐべきである。尙注意して行ふ時は各自の持ち歸るべき旗を一定して置く事である。

4、持ち歸るばかりでなく持ち行かしめる事も加味するならば、やがて直線リレーへの豫備的行動たらしめる方法となる。

5、遊戯化の算術等と連絡すればより生活的となる。

◇カラカヒ鬼

1、からかふ事は既に非社會性の現れである。喧嘩の動機として如何にこの形式が多くあるかは一見して解ることである。而かも之は本能であるとは考へられないから、殊更かゝる性狀の滿足を與へなくてもよいと思ふ。

2、この遊戯を行はせると餘程注意しても、野卑な動作言語を發するから止めた方がよいと思ふ。次の方法は方法として非常に異なるが、三―四個の圓（直徑一、五―二米）を描き、一度圓外に出たら同一圓には歸られないといふ規則を設け、觸られたものは全部鬼となり、他の者は鬼を避けて他の圓に移らせる事にするならば所謂鬼事遊の形式となつて子供は非常によろこんで行ふ。

3、この遊戯が子供に好まれる所は純粹に個人的であり、冒險性に富んでゐる所である。

◇圓形リレーレース

1、子供は勝つ事のみを考へて手段を選ばないと同時に、圓を走る技術は非常に幼稚であるから、正しく競走させることは仲々困難であり、自然不正行爲に對して寬大となり易い。

2、技術の個人差が大であるから劣者を非常に苦しめる事になる。故にかゝる遊戯の實行は何時でも眞劍に行つてゐる態度を認め、劣者を批難しない樣に注意すべきであると思ふ。

3、對群團な方法を採つて行つた方がよい。

◇源平毬入

1、吾々の行動中、走る投げろ。打つの三要素は根柢的なものであらう。其の意味に於て、一年生にもこの遊戯が入れられてゐる事は、投げる本能を滿足させる爲には好材料である。

2、個人的なる遊戯が、主であるが最後を團體的にする等社會性の發展上よい遊戯である。

3、熟練と共に高さを增し、投入の巨離を一定する等の方法をとれば、長期に涉つて興味深く行ひ得る。

4、一人で多數のボールを占有させない樣に注意する必要がある。

◇置換競走

1、實際は二組に分つてよく行はれてゐるが、それは純粋な團體遊戲になるから、用具を多く用意し一チーム十名位として個人競走の場面を入れるべきである。

2、かくすればポテトーを正しく置くと云ふ注意はよく生かされる。

3、かくて體育的にも能率を擧げ同時に本能的になり、又各人は自分の結果に就いて反省しつゝ行ひ得るが故に德育的な目的を達し得る。

◇圓陣鬼

1、興味を持つ遊戲であるが、交替が不明瞭であり、又知つてゐる子供の所へばかり入り、全體として運動量が少である。寧ろ行はせない方がよいかと思ふ。（授業時の遊戲としては）

2、狩獵遊戲であるから他の興味ある遊戲を代行せしめたらよいと思ふ。

3行はせるとすれば十人まで位の小グループにして一列圓陣で行はすればよいと思ふ。

4、チョーク等で自分の居る圓を描かせて行ふ方がよい。

◇陣取

1、この遊戲は色々に變化させ得るものであるから、兒童の發達に合ふ樣に考へてやらねばならない。萬里の長城闘所破り等もこの遊戲の進歩して變型である。

2、この遊戲を尋二兒童は非常によろこんで行つた。而も終り頃にはヂヤンケンを以て捕虜を定める方法を取つて居たが面白い方法であると思ふ。

3、陣地を移動する樣に考へ、帽子取と複合させて、新らしい遊戲を構成すると興味深いものが出來る。

4、特質としては戰鬪形式を取つた團體遊戲であると同時に自由なる個人活動が滿足させられる所にあるから、特にこの點に留意して取扱はねばならないと思ふ。

◇綱引

1、引き合つて勝敗を決する遊戲形式は要目中只一である。故に兒童は非常に興味をもつて迎へる。而も讀本卷二のウンドウクワイも手傳つて興味を大にするものであらう。尋二兒童に出來ない事はないと思ふが、心理的には寧ろ社會性の現れた高學年で行はせた方がよいと思ふ。

2、その代り對個人的な力比の出來るものを加へたらよいであらう。個人的な綱引、押合等である。

◇直線リレーレース

圓形リレーレースよりも技術的には容易であると思ふ。走路を初めは自由にし後には巾一米半

程のコースを作つて行はしめる様にし、折返し方法が自然的でよいと思ふ。

◇帽　子　取

1、取られない爲に帽子を小さくすること、手をもつて頭を掩ふ行爲等は嚴重に取締らねばならない。

2、對個人的な試合を行はせる事（爭鬪性の滿足）、作戰を用ふる方法（兩組は互に見えない場所にそれ〳〵作戰せしめ合圖によつて、互に進みよつて戰ふその際挾擊法を用ふる事。斥候によつて敵狀を知る方法等）等は高學年用として面白いものであり、共同的、團體的行動を有機的に行はせ得る。之を校外の林間等に於て行へば今一層興味を大にし得る。

◇巴　鬼

1、狩獵遊戯の一種であるが早く捕へてしまふ程負けると云ふ矛盾がある遊戯である事は一欠陷である。

2、この矛盾を作戰に利用する事は三年生には望まれない事と思ふ。之等も團體行動を取らせん爲に早く出しすぎたと思はれる教材である。

3、手の接觸を以て捕へた事にするから、非常に不明で物議を釀し易い。

4、人員が一名と二名になつた一時は、名の方は他の一名だけを捕へてもよいと定め矛盾を避けんとしてゐるが、その時の判斷が不明な時が多い。

（二）球　技

◇キツクボール

1、余り組織化し過ぎてゐる。要するに兒童は蹴りたいのであるから、幾つもボールを用意し、何等目的なく自分の近くへ來たらボールを思切つて蹴る様に仕向け、

2、次に何等拘束を設けず連手して互に蹴り合ひ、後逸すれば二人の中へ出て禮をする様にし、又各人はボールに早く接近し遠ざかつて逃げる等、即ち對列フツトボールを圓形において行せはると面白い。

3、解說に於てはキヤプテンキックボールを說明してゐるが、之は蹴る機會が非常に少なく、しかも小區劃內に拘束する事を兒童は好まない。

4、何等拘束のない只ゴールへボールを入れるだけの遊戯を行はせると非常によろこんで行ふものである。

◇對列フツトボール

1、一個のボールに對して、全員が前進又は後退を共にしなければならないから、尋二の兒童には困難である。

2、キックが小さい爲に前進、後退のみ大となつて興味が少ない。

3、故に之を行はもるには、ドリブルで前進する事を許し中央に線を設けそれを乘越えて前進してはならない樣に定め、又後方にも線を設けそれよりも後退してはならないと定めて行ふとよい。

4、發展さすには四方から攻める方法を採ると面白い。

更に一群團組織として行ふ海戰等もこの遊戲の發展した型と考へてよい。

◇圓形ドツヂボール

1、要目遊戲中投げる事と捕へる事を中心とする遊戲中において本遊戲はその基礎的なものである。

2、投げる事と捕へる事は兒童の興味的動作であるから、よろこんで行ふ種目の一つである。

3、然し今までにかゝる形式のものが出て居ない爲、捕へる事が特に下手であるから準備的にはサークルボール等を與へたらよいと思ふ。

4、サークルボール（投げること捕へる事が主である）

十名以下の人數を一列圓陣に並べ、自由にボールのパスを行はせるもので、落したものから順に坐り、最後に殘つたものを勝とする。次にはこの逆に坐つたまゝ行ふ。對群的にするには一チームの人員を一定し、各群の同等位の者のみを集めて更に試合を行はせる。

◇ポートボール

1、本遊戲は團體遊技として非常によいものである。然し之を尋三の兒童に與へる事は非常に困難な事で彼等には團體遊技らしく行へない。內容が困難であるばかりでなく、技術も規則もバスケットボールと大差がない故に無理に行はすれば規則無視の遊技となり德育的に又社會的に何等の效果を擧げ得ず却つて非社會性を擴大する結果となる。

2、ボールを持つて走らないとか、蹴つてはならないとか云ふ規則は彼等に到底守れるものではない。それよりも全身的な動作を欲求するのが子供である。變形を考へるよりも他の本能的遊戲を與へ、之は四年生頃から指導して行く方がより效果的である。

第二節　尋四以上

（一）競走遊戲

第六章　現行の遊戲批判

◇子　殖　鬼

1、競爭遊戯化して尋四に配當した事は適宜な處置であると思ふ。
2、競爭化せず單に鬼事遊びとして行ふ時は尋一の後期から充分に行はせられる。
3、鬼事遊びとしての場合は鬼が四人となれば一人は離れて更に代の者を捕へる様にして行ふのが、適當な方法であると思ふ。
4、この方法は高學年に於ても興味深く行ひ得るが。高學年兒童は共同性の發達から三人組では滿足しない様である。

◇ドリブルボール

1、甚だ不正確に行はれ易い遊戯である上に個人差が大であるから、余りよい遊技とは云へない。
2、ボールをつきながら行ふ方は蹴るよりも一層不正確であるから止めた方がよいと思ふ。行はせるならば競爭を省いて、專ら技術練習として行ふべきであらう。
3、不正確さを防ぐ爲にリレー棒を持たせて行ふ様にするがよい。（蹴る際）更に大きく蹴り込んでもよい線を三分の一（出發線から）程の所に引いて置く事も一方法であり、小圓を描きその中へ入れることを以て次走者が出發する様にするのも一方法である。
4、小さなチームの對抗にした方が興味が多い。

◇片脚角力

1、この方法も一つであるが、相手を定めて全級同時に行はせるのもよい。
2、鬪爭性の遊戯であるから充分注意して行はせなければならない。
3、體の接觸を、しかも力を本體とする、かゝる遊戯は之だけであるから、もつと多く他の教材を採擇すべきである。

◇メデイシンボール

1、ストラツドボールと混同されて行はれるから注意すべきである。
2、等巨離に小圓を描き、其の中に於てプレーする様にしないと責任を持つ活動が鈍る。
3、股下と頭上のみでなく、側方もボールを通す様にすると變化がある。

（二）球　技

◇フツトベ、スボール

1、この遊戯はベースボールタイプに屬する遊戯である。ベースボールの興味深き點を借りて構成したるものであるから、ベースボールに比し興味は少い。

2、然し打つに對して蹴るのであるから、時間を短縮し得る爲學校授業時間の遊戲として又尋四の遊技として適切であり、ベースボール程に技術と用具を必要としない點は之學校にて課すべき遊技として適當である。

3、ボールが大きくなる爲に走者の速力に比し、球の速力の遲い事、盜壘制度設定が不可能である事は、兒童性には合致しない。野球に於ける盜壘そのものは非スポーツマンシップではない。

4、かゝる遊技は後に述べる實行方案のルール構成會によつて自分達のルールを構成せしめて、實行するのが最も適當な方法である。既成のルールに拘泥する必要はない。

5、變形としてはヴアレーボールのサーブの如く手を以て打込む仕方にしても面白い。又ボールを一定の場所に置いて後蹴る事を止め、投手と捕手を定め投手はボールを轉がして捕手に送球し、蹴るものは其のボールを蹴る樣に變化させると興味深くしかも、このタイプの遊技として最も進歩せる野球のルールに接近した方法を取り得る。

6、審判は各壘に置き相手方、又は第三者の兒童に行はせる等の方法を取れば、德育的立場から見て價値を大にし得る。

7、人員を自由にして行はせ得る所は體育的に見ては價値が大であらうが、德育的には眞の共同と

責任に對して望む所を減少する。

8、この遊戲も直ちに入る事は困難であるから、先づ始めは、ロングボール等から入つたら、よいと思ふ。

◇プレーグラウンドボール

1、この遊戲もベースボールタイプの遊戲であるが、フットベースボールよりも進歩した組織でベースボールと凡んど同じである。

2、フットベースボールに於て述べた事は此處にも適用し得る點が多いから、前者を參考されたし。

3、變形としては用具を子供に合ふ樣にして行はせる事である。バットの代りにラケットを、プレーグランドボールに代るに軟式庭球用球よりも重く且つ少年野球用球よりも大きくて軟かいものがよいと思ふ。

◇方形ドッヂボール

1、團體遊技としてチームワークのよくとれた遊技たらしめるには、四年生では隨分無理である。彼等は投當てる事に無中になり、チームワークに就て考へるだけの餘裕を持つて居ない。

2、隨つて隨分不正行爲が繰返され、見苦しい試合をよく見る。故に能力に適した樣なルールを構

成し、定められたルールは絶體に守る様に行はせるべきである。

3、普通生還式の方法が採られてゐるが最も進歩した方法であると思ふ。

4、故に最初（低學年時代）サークルボールから圓形ドッヂボールに入り。次に複式ドッヂボールを行ひ、續いて複式解散ドッヂ（投げ當てたものは複式の味方の圓内に入る）、生還式にと進ませば自然の間に正しく實行し得ると信ずる。かくすれば自然の間に社會性は陶冶される事と思ふ。

◇コーナボール

1、本遊技はバスケットボールの一段階として考へられるよい遊戯であるが兒童の投力を考へてコートを定めねばならないから、自然小區劃となり多數兒童を收容し得ない爲、體操科の時間には餘程考慮しなければならない。

2、然し次により高次な遊技へ發展する一段階であり、社會性を養ふには相當效果あるものである。

3、遊技そのものが餘り興味的でないから、兎角競爭にのみ捕はれる。

◇バスケツトボール

◇ヴアレーボール

◇ア式フツトボール

この三遊技は一般によく行はれてゐるものであり、非常に價値の高い遊技である。尙社會一般のゲームとして公式ルールが定まつてゐるから、そのルールによつて行はれてゐるのが普通である。隨つて大人の作戰並に作戰上の技術がかなり多く、その爲に下手に模倣すれば非スポーツマンシツプとなり、非社會性を培ふ事になる。かゝる遊こそ大に述べんとする學校遊技聯盟の中に於て批判し、眞に兒童の遊戯として與へられるべきものであると思ふ。その標準は指導者と兒童の理解程度により異なるべきものであるから、指導者は冷靜に判斷して正しくスポーツマンシツプを培ひ、よき社會性の陶冶を圖らねばならない。

以上三者はそれ〳〵の型に於ける代表的遊戯であるから、それ〴〵のタイプを完成させる爲の準備的遊戯につき大略附言して置く。

A、バスケツトボールタイプ

サークルボール。キヤプテンボール。ボートボール(AB)。バスケツトボール。

B、ヴアレーボル（コートゲームタイプ）

要目は本遊戯の完成道程として考へさせる何物も持つてゐない。私はサーブ練習の基礎としてロングボール。フツトベースボールの變型として手で打つて行ふ方法等を擧げた。パス練習は小グループを作り連續パス回數の多少を以て競技させる方法を取ればよいと思ふ。

C、ア式アツトボールタイプ

キツクボール（ゴロを蹴る練習として）
對列フツトボール（フライキツクの練習）　ア式蹴球
ハンドボール（形式を教へる爲）

D、ベースボールタイプ

ロングボール。フツトベースボール。ラケツトベースボール（バットの代用にラケツトを使ふ。）プレーグラウンドボール。ベースボール。
又は往復ベース―三角ベース―ベースボール

第七章　遊技の補充教材

前章に於て變化のさせ方並に取扱上の注意等に就き大略述べたから、自然その中に補充教材となるべきものも多々ある。隨つて重複を避ける爲に特に自分が實際取扱つたものの中兒童が興味を持ち、而も價値大なりと認め得るものを掲げて參考に供する事とした。遊戯は同一本能的要素を數多く行はせるよりも、熟練せしめて正確味を持たせ、行動の習慣化を計る樣に勉むべきである。尙尋三迄位は既成の遊戯によるよりも、指導者が兒童と鄕土をよく研究し、土地の狀況を考へた遊戯の創作により、日々の指導に當る事によつて、我國の遊戯教育は進展するものであると思ふ。各學年への適應はそれ〴〵に就て記しておくから注意されたい。尙それ〴〵のタイプによつて分類するのも一方法であるが、複合的なもの及用具を變更すれば他のタイプに入るものがあるから、系統なく羅列し、取扱者の配慮にまつ事とした。

◇自由キツクボール

全生をもつて圓陣を作り連手し、指導者は圓陣内に入つてボールを揃き、兒童は前へボールが

來た際に蹴り、又進んでボールに近付き、自由な方向にキックして二人の間を抜く、抜かれた者は中へ入つて禮をするか又は動物の眞似をして、次次と進行させる。ボールに慣れさせる事が主眼である。尋一適應

◇サークルボール（前節にて說明）

◇センターベース

一人を除いた他の者は大圓の中にそれぞれ小圓を描き、自分の位置とする。除かれた一人は中央の圓內より、自由に他の一人に投げる。投げられた者は捕へて中央圓內に持運び投げた者を追ひかける。始めに投げた者は觸れられるまでに中央なるボールに觸れる。觸れたならば交代して今度はボールを捕へた者が中央より任意に他の者へ投げる。（少人數で行はせる方がよいから休憩時に行はせるとよい。）尋二—三適應

◇ストラツドルボール

A、ボールは如何なる種類のものでもよい。

B、遊技者は五〇cm位の間をおき縱列に列びいづれも股を開く。

C、合圖にて一番生が股の下を通じて最後へ送る最後の生徒はボールをもつて前に走り前同樣。

D、ボールが停止した時以外列生は手をふれられない。

E、十人位を一組として行ふのがよい（五十人ならば五組にて）

F、メデシンボールと異なる點はボールが異ふこと、手をふれないことである。

C、尋一後期から尋二への適應性が大である。

◇旗　送　り

A、橫隊又は圓に赤白を別々にならばせ一番より合圖により二番へ、二番から三番へと順次に送り早く受機をなしたる組を勝とする。

B、足の周りに小さい圓を描かせて行ふも面白い。

C、バドンをもつて行はせればリレーの基礎練習として價値がある。

D、ボールをもつて行へば簡單なパス練習を兼ね得る。

E、なるべく十人までのチームを單位として行ふ方がよい。

F、尋一に適應する。

◇場所取鬼

A、自由に配列させて足の周にかなり大きな圓をかゝせる。

B、指導者はその内一―二を消しておく。
C、他の場所に整列させ合圖により何れの場所でもかまわず占領し占領出來なかつた者を敗けとす。
D、行進間から又は駈歩間から、行ふのも面白い。
E、尊一ならば主なる遊戯とし、それ以上ならば氣分の轉換等に使用すればよい。

◇日月遊び

競技場は二―二、五米を隔てて二本の整列線を引き、各後方に（三〇―四〇米）に安全地帶を設け、それより後方を雲の中とする。
A、指導者は圓内にて圓板を投げる（圓板は赤、白のもの）
B、この時約束する赤が出たら赤が追かけ白が出たら白がおいかける（又は反對）
C、決定と同時に一方はにげ一方は追つて捕へる、最後にとらへられた數によつて勝敗を決す。
D、雲の中へ入れば捕へることは出來ないのである。
E、最後は團體的なものとなるが相對する者を捕へる事とすれば個人的なものとなる。
F、一回毎に一名づゝ繰上げて行ふと興味が大となる。

G、尊二に適應させる。

◇捕虜競爭

競技場は五〇―六〇米を隔てて二線を描き、整列線となし、各線中側二米の所に踏込線を引く。
A、各線の間は各組の兒童に適應させること。
B、用意にて赤生は敵の踏込線まで前進「はじめ」にて敵の線を片脚又は兩脚を踏み込み直ちに自分の踏込線の方へ逃げる白生はすかさず追かける、つかまへたらこれで歸る。
C、必ず相手を定めておくこと。
D、始めは一人づゝ行はせたがよい。
E、自分の踏込線まで入つたら安全である。
F、個人的なものであり、注意力を要し、正しき反應を要求する點、價値がある。
G、尊二―三適應

◇追入ボール

A、列生は各一個づゝボールを持ち列生の前の一名はカゴを背負つて立つ。
B、合圖により×組は◉生の「カゴ」に入れ様として◉生を追ふ。

C、「カゴ」に多くボールを入れた方を勝とする。
D、カゴを負つたものは強者を數名選び極短時間に交代する。
E、走る巨離が大であるから圓又は方形をもつて區劃する方がよい。
F、尋二―三適應

◇ボール取

運動場の中央に一線を描き、その兩側に二〇―三〇米を隔てて直徑二米の圓を描き中にボールを一個置く、學級を二分し、一方を更に攻撃班と防禦班に分つ、攻撃班は中央ラインを挟んで對峙し、防禦班は圓外にてボールを守り、合圖によつて攻撃班は敵陣に突入する。そして帽子を取られる事なく敵のボールを取つて歸れば勝である。

A、帽子取とボールを奪ふことを結合したものである。
B、攻撃班は敵方の防禦班とのみ帽子取を行ひ取られたらデツドとする。
C、圓内に入られたらその後は戰はない。
D、防禦班は入られたら出るときハーフラインまでにおいて帽子をとつてボールを奪還することは出來る。
E、圓内に入つた者は圓外の味方にボールをパスしてもかまはない。
F、尋三―四適應、（尋五の兒童もよろこんで行つた）

◇クラツアバウンド

A、指揮者は「ヨシ」と呼んでボールを高く任意の方向へ投げるプレーヤはボールを得んとその方向に進まねばならない一人がボールをねらつて投げ同時に「ヨシ」と呼ぶ。
B、全部のプレイヤーはボールに向つて突進し（必ず突進すること）うまくそれを得た者が次の投れで打ち止めやうとプレイヤーの一人がボールを得るやプレーヤは直ちに逃げるボールを持つたものはそ者となる。他の者は直ちにボールを得た者から離散する、ボールマンは直ちに他の誰か（自然に最も近くの者を打たうとする樣になるのだが）向つて投げる「プレイヤー」は「ヨシ」と呼ばるのを聞くと同時に又皆ボールのある方に突進し。ボールを得やうとする。
C、ゲームは斯くボールマンから走り去るのとボールを得やうと得ふのを急速な繼續である。
D、殆んど凡ゆる年齢の少年にも喜ばれる活潑で容易なゲームの一である。さうして數分の間に活潑な運動と遊戯を提供する。
E、二年以上適應（師範の生徒もよろこんで行つた）

◇ボールタグ

A、任意(かなり大きく)に區劃を作りプレイヤーを散らばし中の一人を鬼とし、鬼はボールを持ち合圖と共に他のプレイヤーに投當てる打たれたものはボールを握つた位置より他のものを打つ、この時プレイヤーはどんなにして逃げてもよし。

B、受けた時はすぐ前の者に投げ返す。

C、打ち損じたら打つまで行ひ遠くへ飛べば自分で拾ひに行くこと。

D、多人數の時はボールの數を増す。

E、打たれたものは他の圓の外へ出て更に中に居る敵に當てる様にすると複式ドツチボールとなり、打たれたものはみんな味方(鬼)となれば子殖ドツチボールとなる。故にドツチボールタイプの遊戯として考へて發展させるならば有意義である。

F、尋三—四適應

◇キヤプテンボール(A)

競技場は縦三〇—四〇米横二〇—三〇米の矩形となし、横の線の内側約一、五—二米の所に兩方共小圓徑一米大圓徑四米の同心圓を描き、キヤプテンは小圓内に、そのまゝ又は腰掛上に立つ、ガードは大圓内に三名入る。

A、場所はなるべく廣くとつた方がよい。

B、赤白二組に分ちキヤプテン一名、ガード三名をつくり配置、他生は自由に區劃中に散らばるキヤプテンは腰掛上に立つ。

C、指導者は中央にてボールを投げる……開始。

D、ガード以外の者は大圓内に入ることは出來ない、ガードが小圓内に入ることは出來ないがガードは外に出てもよい。

E、ボールを蹴り、持つて走ることは出來ない。亂暴をすることも止めること。

F、ドリブルは許すが二回行つてはならない。

G、ボールを敵味方同時に握つた時はヘルドボールを宜し、指導者はボールを其の場にて上になげる。

H、ボールが外へ出た時は最後にボールにふれたものゝ反對側がインプレーする。

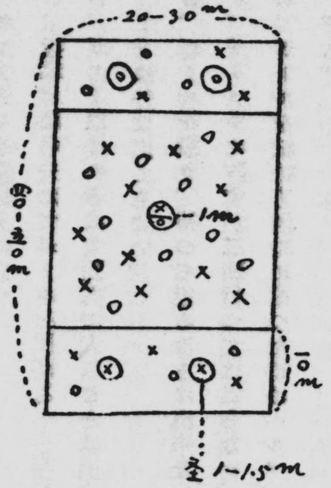
I、反則的行爲に對してはすべて、其の場所より敵方のフリースローとする。

J、中の小圓の代りに跳箱の箱を置き、その中に投入して得點させるも面白いし、尚棍棒を立て

〻おき、之を打倒す様にしても面白い。

K、等四以上適應

◇キヤプテンボール(B)



D、バスケツトボールのルールに準じて行ふ。

E、バスケツトボールの代用運動として可。

F、等五以上適應

A、本競技も隨分種々な方法があるが次に可成組織立つたものについて説明する。

B、圖の如く配置する。

C、センタートスによつて開始しボールをパスしつゝ味方の攻撃班に渡し、攻撃班は何れか一方のキヤプテンに渡す次に他のキヤプテンに渡すとき一點とし、カードは其の間に居てボールを奪ひ。(キヤプテンの圓内に入らず)

◇ロングボール

A、圖の如く配置し打者はキヤツチヤよりボールを受取り片手にて打ちグラウンド内に入れる打者は走つてロングベースに入る。

B、ボールは打たれても×は走路へ入つてはならない。(規定外の者は)、

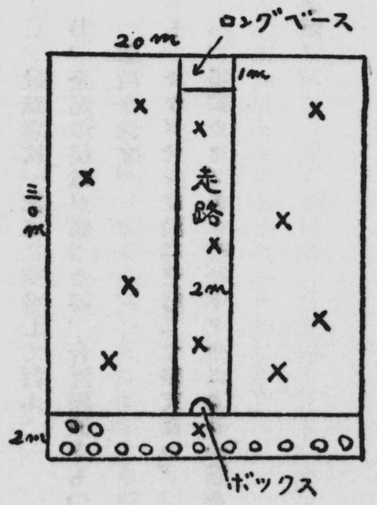
C、走路にて走者にボールを當てたらアウトとしロングベースには三人までは止る事が出來る。

D、ロングベースを一度出たならば必ずホームへ歸らねばならぬ。

E、×はどちらへボールをあててもよい。

F、ホースアウト(ホームにて)はロングベースに三人止つた時に成立する。

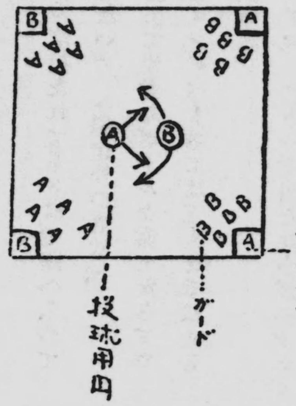
G、交代その他については適宜定めて行ふこと。



H、尋四―五又はそれ以上にも適する。

◇ダブルコーナーボール

a 競技場



（バウンドボールは得點とせず）

H、ガードがキヤッチしたならばガード側一點を得。

I、投球者を二人として行ふのもよい。

J、夏の遊戯である、活動性の少ない所が特徴である。

A、投球用圓内より一名が味方のいづれかのキヤプテンに向つて投球する。

B、敵方ガードは防ぐ。

C、投球者は一回毎に交替して行ふ。

D、全部の投球が終つた時、合計點數をもつて勝敗を決す。

E、キヤプテンは隨時交替して差支ない。

G、得點キヤプテンのキヤッチにより一點を得

K、尋四―五適應

◇大將擊ち

競技場は縱四五―六〇米、横三〇―四〇米の矩形を描き、兩方等巨離に直徑四―五米の圓を作り一名のキヤプテンを置き中央に直徑七〇糎の小圓を描きセンターにトスせしむ。

A、センタートスによつて開始、ボートボール及バスケツトボールと同樣の方法にて行ふも敵の大將の圓に近付くや味方の攻擊軍は一齊に敵のサークルを取卷き敵はこれをガードしつゝ行はれ味方は連絡によつて敵將に打當て樣とする、而し大將の圓内には敵味方共入つてはならぬ。

B、大將は逃げ又はボールを受止めて味方に渡しても差支ない。

C、ヘルドボールの宣言を早くすれば大して亂暴にはならない。

D、其の他はバスケツトボールの規則を適用し又適宜定めるがよい。

E、キヤプテンボール(B)の變化とも見得るものである。之を騎馬（一頭）に一名を乘らせ之に當てる事を行はせるのも興味あるものである。尋四以上適應

◇海　戰

A、對列フットボールの列を分ち一チームを四人又は三人としたものである、興味深いものゝ一

種である。兩組は約30米を隔てて相對する。

B、先蹴を定めて行ふ、敵の頭上を越せばそのチームは沈沒として退くのである（連手間を抜かれても沈沒として可）

C、混戰すれば一時停止し指導者はボールをその場所にて投上げる。

D、防ぐには連手をとかねば如何にしてもよい。

E、チーム中の一名を艦長として指揮させるもよい。

F、パスによつてよく連絡し挾撃する樣に指導すると面白い。

G、等四の兒童に行はせたが中々むづかしい、（興味は有るが）等五以上に適應させるとよい。

◇複式解散ドッヂボール

A、競技は二個の直徑十米程の圓によつて行はれるもので、一つの圓にはA組他の圓にはB組が入り、一名だけ敵中に入つて鬼となり、敵にボールを投げ當てる。

B、AB兩組に分ち各組より一名を出し敵方に入れる。

C、合圖と共に鬼は投げあてる、以外の者はボールを互にパスし合つて鬼をなぶる。

D、鬼はボールを取るべく走る。

E、ボールを持つたら止ること（三歩以内で）

F、打たれたものは他の圓内に行き鬼となる。

G、一定時間の後生者多きを勝とする。

H、ドッヂボールとバスケツトボールのガード練習等を兼ねたものである。

I、等五適應。

◇キックハールボール

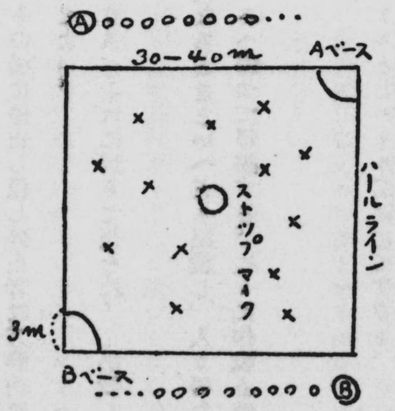
C組をAB二班に分ち

A、C組（攻撃）の一番から順次交互にベースからボールを蹴る。

但し(A)が蹴つてBベースに入るかストップとなるまでは(B)は蹴らない。

B、方形内を敵が走つてゐる間に打ち當てゝアウトとするものである。

C、×組は形勢によつてストップマークの地床にボ



ールを入れたら走者は笛（指揮者がふく）の音と共にその場に停止し但し停止者は方形内に三人以内でボールがけられると同時に次のベースへ走つてよい。

D、得點はAベースよりBベースに到り又はBベースよりAベースに到りて後それ〳〵出發したベースへ歸つた數をもつてする。

E、ベースには二人は止り得る、三人となるときは如何なるときといへども出發し、入り得ない時は方形内をにげまわる。（その間に隙を見てBベースへ歸つて得點する。こゝに作戰上の面白さがある。）

F、三人アウトとなつたら交代して行ふ。

G、ハールライン外にノーバウンドにて落下した時はハールとしハール二回にてアウト。但し一度フエアグランドに落下して出たものは、フエアーとする。

H、フライキックを受止められてもアウトではない。

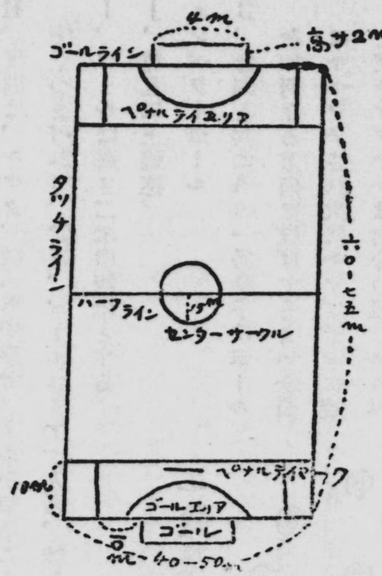
I、其の他必要に應じルールを變更又は附加して差支ない。

備考　本間茂雄氏考察のものを變化したものである。

J、壽五以上適應。

◇ハンドボール

A競技場



B、人員は何人にてもよいが正式に行ふ時は十一人とする。

門衛……一名　後衛二人　中衛三人　前衛五人（配置はア式フットに準ず）

C、先攻側の投者により始まる、先攻側は合圖以前にセンターサークル内に入つてもよい。

D、投げる以前に於てハーフライを越へてはならぬ。

E、互に連絡をとりつゝ敵ゴールに近づきゴールラインを越へる事なくゴールに投入すれば一點である。

F、ペナルテイエリア内に於て反則し、それが防禦方にあつた時はペナルテイマークよりフリースローしゴールキイパーのみがガードする。

攻撃してゐる時の反則はその場所よりフリースロー其の他の場合においては反則の行はれた場所からフリースローとする。

G、アウトオブバウンズはボートボールに同じ。

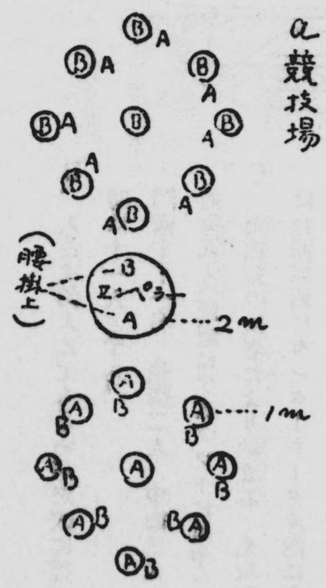
H、反則は、キック、敵から兩手でボールを取ること、三歩以上歩き又は走ること、抱きつく、突くつまづかる、當る、ゴールエリアに入る、球をあてる、オフサイド等

I、ゴールは高さ二米巾四米とする。

J、等五以上適應。

◆エンペラーボール

B、合圖と共にAの一番壘手はボールを如何なる方向に投げてもよい全員にキヤツチされ次にキヤプテンに渡ればキヤプテンは自分の組のエムペラーに投渡すキヤツチされたら二點とする、ガードは圓内に入ることな



くボールを奪ふのである。

C、Bガードが奪つたら自分の組の壘手に渡すB壘手の間にパスが行はれる、奪ふときは只たゝき落すだけ許される。

D、次にAガードがボールを取返したならば前に取られたA壘手から又パスが行はれる。

E、かくして一定時間の後の得點數により勝負を決定する。

F、反則としては　(1)、圓内にガードが入つた時

(2)、全員の手を經ずしてキヤプテンに渡つた時

(3)、キヤプテンは三人の壘手の手を經てエムペラーに渡すことがゆるされるがそれ以上になつた時

以上の反則は全て敵方にボールを渡す、外に出たボールはガードが拾ふこと。

G、其の他　(1)、エムペラ壘を指導者一人として行つてもよい

(2)、上達したならばボール二個とし、取られたら一番よりやり直しとするもよし、又得點毎に順次位置を交替して行ふも可

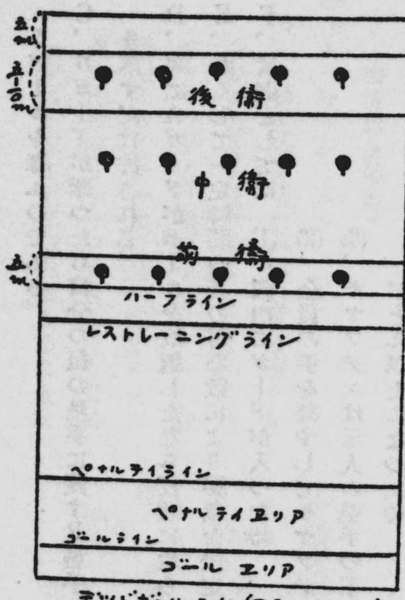
(3)、其の他適當にルールを定めてよい

(4)、本遊戯はバスケットボールのパスとドッヂを利用したもので戦法について工夫させる事も面白い。

○H、等六以上適應。

◇體研ボール

A競技場



B、競技者は正式試合には各方一五名宛とするも練習には何人でもよい。

C、正式試合には三十分とし中間に一回五分の休憩をおく。

D、ボールはラグビーフットボール又はア式フットボールにてもよい

E、演　技

1、先投球側の前衛が合圖と同時に投球することにより始めら

れる

2、最初の投球は味方のゴールの方へ投げてはならない、競技者は投球前にレストレーニングラインを越へてはならぬ。

3、以上に反すれば敵方にその位置から自由投を許す。

F、規　則

1、脚では一切ボールは捌かれない。

2、球をもつて走り、又は如何なる方向へ投げてもよいがペナルティエリア内にては前方投は許されない。

3、敵方のボールを取つてもよい、ボールを所持してゐる者に兩手にて抱くことをタックルといふ、これが行はれたら直ちにボールを離すこと。

4、次の場合はボールはデットである。

(1)、ボールが外へ出たとき。

(2)、得點後。

(3)、犯則の後。

(4)、タイムアウトの時。
(5)、ゴールエリヤ内で防禦方の者がボールを地につけたとき。

G、得　點
(1)、球を敵方のゴールエリヤ内の地表につけたときは一點。
(2)、味方が着けた時はデツトとなりボールはペナルテイラインから味方によつて自由投。

H、犯　則
(1)、パーソナルハウルは次の場合
押し、曝かせ、其の他無用の亂暴、タックルされてゐる競技者に更にタックルする等
(2)、パーソナルハウルの時は其場から自由投（敵は五米以外にあること）
(3)、テクニカルハウル
タックルされてボールをダウンせざること及び球を蹴る、ペナルテイエリアで前方へ投げ、又は打ち止める、外にボールを出した時。
(4)、テクニカルハウルの時は其の近くのタッチラインより投入……（頭上から兩手で）

J、練習法

(1)、球をもつて走る練習からゴールエリアに着けること。
(2)、走りながら各方向へのパス練習……（數人が並んで走り一方より順次後方に送り最後のものは全速力にて走つて隣生より先に出て後方パス續いて同じく）
(3)、ガードを避けて走る練習。
(4)、タックルの練習其他狀勢に應じ練習すること。

K、高男に適應。

第八章　實行方案

こゝに最後の問題として實行方案につき考察の歩を進め様とするに當り、學校に於て團體遊戲が行はれる時、實行の要素として、實行する兒童、指導者、審判者、見てゐる兒童の四つは是非考へねばならない事である。其の中指導者と審判は共に教師によつて實行せられる。而して教師は兒童の趣向を決し、スポーツマンシップの基準を確立し、道德的行爲を決するものであるから、道德的立場からも教師の修養は遊戲の實行に大なる關係を持ち來すのである。

兒童は遊戲生活において全ての價値生活に向ふ事が出來るが、惡傾向の源泉も亦其の中にある。故に兒童の自發的自己活動を阻止することなく監督指導せられねばならない。かゝる指導なくしては身心の發達は期し難いのである。

第一節　指導者

指導者が眞に指導者である時遊びの實行は全て道德的となる。遊技の指導をなす事によつて兒童

に社會の爲に忠誠であることを實行せしめ、共同團體における完全なる一員たらしめ以て正義と犧牲的精神の眞意義を體驗させる爲の標識でなくてはならない。只にかゝるものが教育的に考へて必要であるばかりでなく、兒童自身も亦要求してゐるのである。故に指導者が標識的存在でなくなつた時、其處に殘されるものは單なる動作の繰返しと惡德の掃溜ばかりである。

然し此處に云ふ標識とは强制とか威嚇による標識ではない。愛着心、信賴心、尊敬心をもつてする所の標識である。

遊戲を體育の手段とのみ考へる事は既に以前の目的觀に立つた考へである。高潔なるスポーツマンシップ、心的耐久力は近代遊技によつて養はれた新鮮なる德目である事を銘記すべきである。故に善良な判斷、敏活性、技巧、試實、勇氣及び理想的競技道を練習させる事に專心すべく、身體のみを考へる指導者も、勝つ事のみを考へる指導者も共に善良な指導者ではない。競技と生理學を心得る事のみによつては立派な指導者たり得ない。善良なる指導者は道德的判斷並に心理學的事象に對する敏感さの持主であらねばならない。

何となれば、指導者から見れば不自然であり、變なフォームであるかも知れないが、競技者自身にとつては實に眞劍な問題であるに相違ないからである。故に充分な注意をもつて、己の全能力を

傾注して審判に當り、叮嚀懇切公平に指導しなければならない。かくてこそ遊戯の神聖を維持し、品性の陶冶に參畫し得るのである。

第二節　兒童

次に述べんとする所のものは指導者としては達せしむべき目的であり、兒童としては實行の態度たり得るのである。この兒童の態度を分析すれば競技に對する態度、自己の屬するチームに對する態度、指導者（審判等を含む）に對する態度、觀てゐる者に對する態度、觀る時の態度等に分けられる。

イ、競技に對する態度

遊技本來の意味はスポートを愛好する點にある。然し眞に遊技者たる時品性の陶冶が行はれる事を思ふ時、その態度は名譽に對する高い感じ、公正、立派な行動、禮儀、共同、犧牲、誠實、自制、勇氣等の上に立つてゐるのであつて、勝たんが爲に規則を回避したり、又其の精神を曲解するが如きはスポーツの精神に反するもので、寧ろ正義の敗戰を選ばしむべきである。不正直に行ふ方が勝味は多い、勝ちたいのは人情である。然し不利だと知りつゝ正しい路を擇ばせる所にスポーツ訓練の特質がある。元來全力を傾倒しての敗戰は不名譽でない。正直すぎるから敗けるのだと云はれる事はスポーツマンとしての名譽である。かゝる觀衆は共に語るに足らない所のもので、スポーツに於ては規範は何時も只一つあるだけである。勝利の榮光よりも名を惜しむのである。然し徒らに勝利を輕視する事はスポーツを惰落せしめるものである事を忘れてはならない。

ロ、チームに對する態度

チームゲームに參加するものは、自己の屬するチームに對して、種々なる條件の下に行動することを要求される。即ち身體修練の規約を忠實に守ること、完全なチームの共同一致を確乎たらしめる爲に犧牲となること、又最高の努力を盡してチームの作戰を支持すること等である。

故によきチームの成員となる爲には自己の任務を完全に遂行するばかりでなく、チーム並に他の成員に對して忠誠であり、名譽ある代表者であるといふ自覺の下に最善を盡くすの覺悟がなくてはならない。

ハ、對手に對する態度

遊技は練習、試合を通じて本質的に激烈であり、殺伐である競爭並に鬪爭である。然しながら一定の規則内に於ける行動で、力と忍耐力と熟練との最高努力に加ふるに精神力の至上の發揮を名譽

にかけて競ふ組織的行動である。（勿論低學年の遊戯は別であるが組織的でない所が異なる所である。）故に戰略は屢々用ゆるけれ共、謀計詐術は絶對に許さるべからざるものである。

自分が他から斯うせられたい。かくありたいと希望することを對手にも其の通り振舞はせる事を是認しなければならない。と同時に對手の正々堂々たる行動並に巧妙なる演技に對して稱讃することに吝であつてはならないのである。

ニ、指導者に對する態度

既に指導者に就ては述べたから、この點は指導者の人格によつて、如何樣にも變化し得るものである事を附言すればそれで事足ると思ふ。然し審判としては教師でない他の者が行ふ事も豫期するが故に其の場合に於ても亦、規範の具顯者であるといふ意味において、絶對の信賴と心からなる服從を持つて實行すべきである。

ホ、觀てゐる者に對する態度

遊技の實施は觀てゐる者を豫想する事は不必要なる事の樣であるが、學級の競爭においても尙幾人かを豫想し得るし又之が競技會等の形式を採る時は競技會に就ての一要素で善惡に對する力强き教育力となつてゐるのである。

然し競技者は一切之等の者に對して關心を持つことなく實行する事が最も望ましい事で、グラウンドスタンドプレーの如き實に下劣なる行爲である事の自覺が最も大切な要件である。

ヘ、觀る時の態度

觀る時は觀る事によつて樂しむと同時に自分も審判者となつた考へで競技者の行爲の善惡を決定する爲に參加するの心持がなくてはならない。

然し一方正しき賞讃者となりグラウンド上におけるスポーツマンシップの證明者となる事も忘られない一面である。競技會等に於て徒らなるグランドスタンドプレーに對して賞讃するが如き、スポーツ淨化の此際一切排除したいものである。

要するに競技に關係する全ての者がスポーツマンシップの如何なるものなるか理解し、この理解を基礎として、スポーツによる教育が行はれる時今まで考へてゐたより以上に道德的效果を納め得るもので、かゝる環境にして始めて、共同社會性を養成し得るものである事を信ずる。

左に參考までにスポーマンシップの法典として、紐育市の諸學校聯盟に於に遵守されてゐるものを揭げておく。

一、實行すべきこと。

（イ）常に堂々とプレイせよ。
（ロ）終りに強くプレイせよ。
（ハ）主將を尊敬せよ。
（ニ）チイームの成功の爲めにプレイせよ。
（ホ）身體修練の規則を守れ。
（ヘ）コーチ及び主將の命令に從へ。
（ト）すべて學校の課業に力を入れよ。
（チ）何時も對手にも公平なる條件を與へよ。
（リ）役員を尊敬せよ、よし豫期に反對なる判定と雖も心地よく受認せよ。

二、爲してはならぬこと。
（イ）我儘であり卑劣であるな。
（ロ）判定が間違つてゐても怒るな。
（ハ）賞品の爲めにプレイするな。
（ニ）グランドスタンドプレイをなすな。

（ホ）體力を濫用するな。
（ヘ）責任を逃れるな。
（ト）勉強を忽諸にするな。
（チ）賭博をするな。賭博は忠誠に必要ではない。
（リ）對手を賓客として迎へよ。
（ヌ）失敗の爲めに役員を批難するな。

三、敗戰の時爲すべきこと。
（イ）勝者を祝福せよ。
（ロ）勝者の功績を承認せよ。
（ハ）敗戰の跡を辿つて缺點を矯正せよ。

四、敗戰の時爲さぬこと。
（イ）失望を現すな。
（ロ）抗議を爲すな、敗戰の辯解をするな。

五、勝利を獲た時の態度。

（イ）寛大鷹揚なれ。
（ロ）謙遜なれ。
（ハ）對手に同情せよ。
（ニ）誇るな。
（ホ）得意になつて歡聲を發するな。（體育と競技から）

第三節　方法

イ、親友形成時代（尋一―尋三）

一つの遊戯が兒童に課せられる事は結局前述せる實行に伴ふ態度の教養を意味するが。方法には學年的な相違がある。小學校生活を大體三期に分つて社會性を考察したが、この事は又實行方案においても當然必要な分類である。

共同社會性の養成は先づお互が理解し合ふといふ事から始まる。特に一、二年生の間に親友は學級内に於て飽和する狀態になるのであるから、この飽和を促進すべく生活環境を整理する必要がある教室内における配列も只單なる過然を利用することなく、又一ケ年間同一場所に置く事なく配列する様に工夫し、遊戯化的學習に於ける組分けの如きも固定的なものでなく斷えず變化せしめ全學級兒童が互に相交はつて學習を進展する様に考へねばならない。

尋一の初期より學級を二分しての競爭等は愼むべき事であり、最初は二人を單位とした生活から漸次各チームの成員を大にする様に考慮し、どこまでも個人的なる遊技滿足を中心として進む様に注意すべきである。早くより大きい團體での競爭を强ひすぎる結果は能力小なる兒童を徒らに苦しめ、自己卑下の感情を募らせ延いては反社會性なる態度をとらせる様になる。現代教育が個性の尊重を叫びながらその實際に於ては自己卑下の感情を作らせる様に教育されてゐるのであるまいか。未だ競爭心も充分に現れて居ない幼少なる兒童に共同的な遊戯を與へ、競爭心を煽る事は實に危險な學習であると云はねばならない。私の經驗からするも活動そのものに興味を感じ全體としてのチーム活動に興味を覺えるのは早くも二年の終頃からである。故に三年迄位は現在よりも多くの遊戯を與へ各本能の滿足を個人的に得させる事が大切な要件である。

競技的なるものが遊戯の主體となるのは四年以後であると思ふ。しかも三年迄位は指導者の言を率直に受入れて行動する時代であるから、實行方案として組織立つたものの必要はない。將來における基礎的技術の練習と本能の滿足の爲に系統すれば足ると思ふ。故にこの期に於ては體操科の學

習及休憩時の指導を本體とし、種々なる遊戯器具の設備が大きな方案の一つとなる。

ロ、順應時代

尋四―尋五の時代に於ては組織立てられた共同遊戯を教へる時代で組織的遊戯への順應を圖る意味でかく名付けたのである。體操科の時間と放課後の時間をこの爲に使用し、各學級にはそれ〴〵遊戯の團體を二チームづつ又は兒童の希望者多き時は三チームも作り練習と試合を行はせる樣に考へたい。この期に於て課す所のものは例へば公式なゲームであつても兒童の能力に合致する樣に考へ、指導者を補助として自分達の遊戯を作り、自治的に實行する樣に訓練すべきである。

例へば野球に於て一本筋の野球であるとか、三角野球であるとか、又規則に就ても四球を無しにするとか、色々の方法が考へられよう。かくして兒童の能力に合つた、しかも兒童の構成した遊戯によつて練習と試合を進行させ、徒らなる大人の遊戯を模做させる事を止めしめるべきである。何んとなれば兒童は大人の作戰上の技術に對し、その意味を解せずして模做する結果、現在の兒童遊戯中には非社會的部分が非常に多いからである。

尋三迄は自己の屬するチームが移動して居たのであるが、この期に入ればチームは斷えず固定した狀態に置く事が、責任を感ぜしめる一手段であり、斷えず同一チームを背後に有する時不知不識の間に傳統を構成し、スポーツマンシップの發現に有利な情勢を釀すものである。三年迄に學級間の結合が充分に育成せられてゐるならば。遊戯の際に於ける同一學級內二チームの對立は排他的氣分を釀成するものとは考へられない。次に述べんとする全體組織中においては、この方法が團體間の社交を教へる爲のよき手段であると思ふ。

ハ、反省實行時代

尋六より高等科にかけての遊戯は現存せる遊戯から、あらゆる非スポーマンシップの現れを取除いて實行させる時代である。練習、試合を通じて自己の行動に反省を加へ、その反省を實行の上に現はす事によつて品性陶冶に參畫せしめんとする企である。遊戯の際に於ける同一學級內二チームの對立は排他的氣遊戯形式もその內容も共に現存せる姿を教へ學ばしめる時代であるが全ての事が自治的に行はれる事を主態としたい。

以下この點に就て述べる。この方法は主としてこの期の兒童を中心とし考へてゐるが、前期の兒童もよく爲し得る所で放課後の時間を利用する事を本體とし、學級に於ける練習並に試合は體操科の時間にも行ひ、學級、學年の試合反省は修身の時間をも之に充當して然るべきものであると思ふ。

第一に爲すべき事は運動精神の意義、競技に對する態度、チームに對する態度、相手に對する態

度、觀てゐる者に對する態度役員に對する態度、觀る場合の態度に就に一通りの理解を與へる。

第二、教材（假りにア式蹴球を採る）を提出し、學級又は學年の聯盟を組織する。一學年一學級ならば學級にて二チーム編成し、又多數同學年學級ある場合も學級として二チーム編成する方がよい。

第三、該遊戯（現在行はれてゐるもの）の概念を與へ、練習と試合を行ふ。

第四、運動に對する態度から、練習し、試合したる遊戯を批判する……なるべく座談的に……。同時に兒童達は自治的に、學級又は學年ア式フツトボールを構成する。かくて實行と反省を繰返しつゝ運動精神の確立を圖る。之が第一段の實行である。

第五、主として學年對抗試合方法並にルールを協定する學校内の役員會を組織する。かくして後、學年對抗試合を行ひ、必ず反省會を開いて反省をなす。之が第二段の實行である。

第六、學校運動競技聯盟を組織する。從來の如く大組織による聯盟よりも、地理的に相接する二、三小學校の聯盟が望ましい。勿論大組織のものも必要ではあるが。……この聯盟は如何なる學年も或種の遊戯に對して試合し得る樣に規則を作る事が大切である。本校兒童は本年度に入つてから他校と自發的に試合を行つた事、尋六は野球三回、蹴球一回、尋四兒童の如きも野球試合二回行つてゐる。他校と試合する時は必ず屆出でさしてゐるが未だ聯盟を組織する所までは行つてゐない。かゝる兒童の狀勢であるから之を指導し、遊戯による前述せる價値を實理せんとする企は必ずしも徒勞でないと思ふ。今までに彼等が行ひつゝある樣を見てゐるに、彼等は喧嘩腰で行つてゐるから後には喧嘩別れをする事が多いのである。その原因の多くは適當なる審判の無い事と一定したルールを持つてゐない事に歸因するのである。以上は學年を本體として考へたが農村等に於ては部落本位のかゝる組織と考へる事も有效なる社會性陶冶の具體的方案であり、同時に有力なる生活指導の教育である。

主要参考書

教の由つて生ずる所	西　晋一郎著
教育と道徳	同
理論的教育學	篠原助市著
勞作教育	小西重直著
教育科學第一册	土田杏村著
現今教育學上の主問題	
大思想全集（社會學）	荻原　擴著
倫理學概論	上野陽一著
兒童心理學精義	久保良英著
兒童心理學	佐藤龜太郎著
兒童心理と家庭教育	
教育の實際に應用したる兒童心理學	關　寛之著
競技心理學	グリフイス原著
體育心理學	松井三雄著
兒童體育心理	同
競技指導法	野口源三郎著
優良兒童教育第五報告	本校第二教室

昭和七年八月二十日　印刷
昭和七年八月廿五日　發行

文泉堂書房

遊戯と道徳

定價七拾五錢

著作者　小川忠治

印刷兼發行者　吉田信造
東京市本郷區駒込動坂町一三六

發行所　文泉堂書房
東京市神田區錦町一ノ二
（振替東京一六二一八番）
京都市寺町姉小路上ル
（振替大阪五一九七三番）

初等教育叢書

文學博士　小西重直　序

新文話論と其實際　關　厚著
新時代の學級經營　堺榮伍著
文字教育の建設　近藤豹三著
眞使命の國史教育論と實際　相原慧著
讀方教育の傾向　西宮精三著
勞作教育と手工教育の方途　常深伍著
私の修身教育　山田政治著
地理教育の諸問題　赤木良三著
文と兒童の綜合に立つ自覺的讀方教育　平野耕作著

以下續刊

全三十冊

四六判・各百五十頁
定價各七十五錢　送料八錢

文泉堂書房の教育書

最新刊　村瀬仁市著　**國史**　教授に於ける　**至難教材の究明**　四六判　二百八十頁　定價　一圓八十五錢　送料　十

最新刊　立川昇藏著　郷土教育より見たる　**國語教育**　四六判　三百三十頁　定價　一圓八十錢　送料　十四

最新刊　大森保平著　協同社會觀に立てる　**學級教育の理論と實際**　菊版　五百餘頁　定價　三圓三十錢　送料　二十四

最新刊　平井善次著　**更生への音樂教育**　四六版　五百頁　定價　二圓八十錢　送料　十八

最新刊　金子藤四郎　新補充教材　松尾保之著　としての　**兒童の遊戯**　四六版　二百五十頁　定價　一圓五十錢　送料　十二

三版　高橋義雄著　最近の教育原理を基低せる　**算術指導體系**　四六版　三百頁　定價　一圓九十錢　送料　十二

再版　平野武夫著　文章讀會力の發達に基く　**發展的讀方指導體系**　四六版　二百頁　定價　一圓三十錢　送料　十二

再版　**小學教員**　各科別檢定試驗　**問題全集**　三六版　二百四十頁　定價　九十錢　送料　六

259
5
121

Property of the Library of the Supreme Court of Appeals of West Virginia